

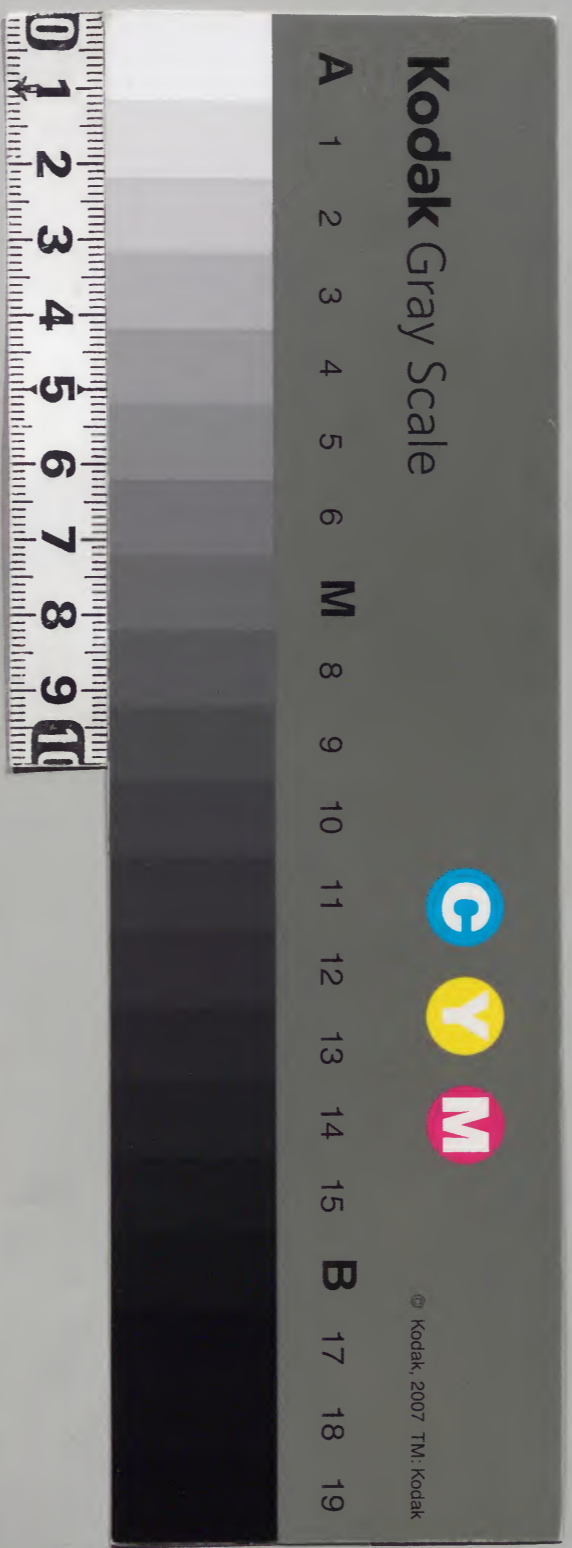
紀伊國續風土記 十一十二

名草郡六七

和書門類		二九〇七一號	函	二架	冊	九四冊
------	--	--------	---	----	---	-----

和書		二九〇七一號	冊	九四冊	冊	七五冊
----	--	--------	---	-----	---	-----

內閣文庫		
番號	和	29071
冊數	94 ( 9 )	
函號	175	201





欽  
省  
名  
庫  
印

圖書  
局  
印

圖書  
府  
印

紀伊續風土記卷之十一

草郡第六

栗栖莊久留須總二箇村

栗栖村五箇所に分也

西栗栖各小名あり

東栗栖八軒屋

出島村栗栖村枚郷

岩橋莊伊波世一箇村

内一〇一八〇號

馬場栗栖

莊論



岩橋村 各箇所々分也

梶曾 高柳

北 東野

峯 小路

皮田

出島

宇田

中里

栗栖岩橋二莊岩橋東より栗栖西より其  
屬邑と合せて三箇村東と和佐莊小接し北ハ  
紀川と隔ち、田井莊と界し西と神宮上郷及

直川莊小接し南と山と隔ち、吉禮岡崎西莊  
と界し其廣袤東西三十町許南北一里餘此地  
古の國懸乃神戶若くは日前此神戶の地なり  
人郷廢と後栗栖岩橋二莊の地なりと栗  
栖莊名始りて保延此文書小なりハる  
此地舊紀川の流に沿へる以高水此廻る洲  
川いふ義よて栗栖を以ぬる包し那賀郡凡  
栖ふと、同一名ふ小人中世粉河寺の盛ふる  
頃此地と登蟲食して私小押領せしよし也

粉河寺  
所藏

士姓舊  
事記











寛仁の頃粟根紀成實といふものあり置川粟  
根平九と所知とあり粉河寺に置川地頭  
職を保延の頃小至して日前國懸西宮造宮乃  
課役と此地小宛てし粉河寺其令と受と改  
して訴訟年と経て決せしに其時の國守  
藤原公重の養父徳大寺左大臣公能公遠小疾  
よ臥王頼智法橋といふもの粉河寺に鎮守丹  
生明神の宗ありていぬにん公能公懼とて  
新小當莊と粉河寺小寄進と粉河寺所藏小徳  
寄進状 永仁間地頭昌圓法橋といふもの湯淺  
あり

四郎入道願蓮といふもの私闘ぬてりて村  
民の憂となりて以て北條氏其地と没收し高  
役野八郎入道寂一と給人と粉河寺并小徳  
大寺家と此事と關東小訴へ又再當莊粉河  
寺願望ふれ入粉河寺に在三分一と誓度院  
乃別領といふ是れ先誓度院の住侶行秀とい  
弘演と將軍家の婦依み因社壇并殿等と修  
營し且去年粟栖莊安堵の下知状と賜ふと全  
く行秀の力ふとハ其功尔南北朝の時尔至  
報し分了鎮ふとハ其功尔南北朝の時尔至  
て在此地頭と栗栖大楠元成實の子孫といふ天正乃

莊論

四



頃尔ハ根來寺ノ此地ト押領ト見ル也キ是古ク栗栖莊領主沿革乃梗槩ハ岩橋ハ古湯橋小作ハ湯ハ堰ハ此邊ト堰筋ハ紀川ト引テ宮郷ノ田地ハ灌ル也ト以テ不ト宮堰ト不ハ其堰ヲ架テ此橋ト湯橋ト呼ビ遂ニ其村名トも不レ終ル也キ其橋ト高橋又金橋ト也キ此小名皮田ノ西ル湯ノ谷ヲ以テ少ク村神レ社地小ク傳ハ古ク温泉一處ト今ハ高橋明以テ承安建久ハ頃ニ至リ湯淺新大夫秦宿禰

望ム以テ不レ長クの河ニ湯橋莊司トシて莊中ノ事ト司ト事ハ岩橋村舊家岩橋文治六年鎌倉將軍家ト此地ト熊野鳥居禪尼小ト與ス東鑑ト見ル也キ此地ト熊野ノ神領ト不レ應レ永ク為ス義乃妻ハ不レ也キ是レ也キ熊野ノ神領ト不レ應レ永ク元年將軍義滿公ノ此地ト石清水ハ幡宮ハ寄附セ也キ此時石清水ノ八幡伊天正乃頃也キ根來寺ノ此地ト押領ト院等衆徒ト也キ十人ノ分地也キ不レ見ル事ハ淺野家ノ時ハ淺野左衛門尉氏定此地ハ此地頭也是古ク也キ岩橋莊領



主沿革の梗槩を二莊土地膏腴平行南小山  
あり薪樵用乏一か所以北小川あり運漕其梗  
と得たり且若山小接近を以て諸事便宜と  
産業ふし易し然きとて販賣の習俗ありて質  
實の純風ふし慶長檢地の時二莊と合せ安  
橋莊といふ今舊小復して二莊とと

○宮堰川

○四箇堰川

右名草郡山川の部に載り

栗栖村

久留須

五箇所小分也

西栗栖

南栗栖

馬場栗栖

東栗栖

八軒屋

田畑高 千七百十九石一斗二升七合

家數 百六十九軒

家人數 六百二十二人

村の名義莊論小詳あり大村なりを以て高村居  
五箇所小分は松島村の東六町小ありと八軒



屋<sup>せ</sup>い<sup>ふ</sup>八軒屋の己方八町許小河<sup>は</sup>以西栗  
 栖<sup>と</sup>い<sup>ひ</sup>西栗栖の坤四町半<sup>は</sup>り<sup>は</sup>南栗栖  
 とい<sup>ふ</sup>又新出嶋<sup>と</sup>を<sup>い</sup>ぬ<sup>は</sup>焼<sup>は</sup>芝<sup>と</sup>い<sup>ふ</sup>西  
 栗栖<sup>は</sup>巽三町半<sup>は</sup>り<sup>は</sup>馬場栗栖<sup>と</sup>い<sup>ふ</sup>西  
 栗栖<sup>は</sup>寅方八町<sup>は</sup>り<sup>は</sup>東栗栖<sup>と</sup>い<sup>ふ</sup>西栗  
 栖<sup>は</sup>西乃<sup>は</sup>人口<sup>は</sup>石橋<sup>り</sup>と<sup>い</sup>期<sup>は</sup>鏡橋<sup>と</sup>い<sup>ふ</sup>  
 側<sup>は</sup>ま<sup>は</sup>高倉寺<sup>中</sup>興<sup>は</sup>比<sup>立</sup>乃  
 名<sup>と</sup>と<sup>り</sup>て<sup>期</sup>鏡<sup>と</sup>名<sup>は</sup>は  
 生明神の馬場<sup>り</sup>と<sup>い</sup>地<sup>は</sup>り<sup>は</sup>故<sup>は</sup>小<sup>名</sup>と<sup>い</sup>

栗栖村

○紀氏栗栖神社

境内 東西十七間 南北二十二間

本社 五尺二寸 四尺二寸

合祀 丹生明神 拜殿

撰社 八幡宮

本國神名帳正一位紀氏栗栖大神

西栗栖の東<sup>は</sup>り<sup>は</sup>馬場栗栖南栗栖西栗栖及  
 出島村<sup>は</sup>氏神<sup>を</sup>り<sup>祭</sup>神<sup>許</sup>を<sup>り</sup>氏<sup>以</sup>神<sup>名</sup>を<sup>り</sup>據<sup>也</sup>  
 紀氏<sup>乃</sup>此<sup>地</sup>尔<sup>住</sup>と<sup>り</sup>尔<sup>の</sup>其<sup>祖</sup>神<sup>天道</sup>根<sup>命</sup>  
 と<sup>祀</sup>と<sup>り</sup>な<sup>る</sup>屋<sup>じ</sup>栗栖<sup>と</sup>稱<sup>と</sup>い<sup>ふ</sup>栗栖<sup>村</sup>小  
 座<sup>と</sup>と<sup>い</sup>て<sup>稱</sup>と<sup>い</sup>ふ<sup>へ</sup>と<sup>り</sup>と<sup>り</sup>神<sup>名</sup>帳<sup>載</sup>と<sup>い</sup>ふ

栗栖村



之可位階其貴を極る以見は獨紀氏一家  
の祀所ありし寸 朝廷に御崇敬も尋常な  
らば事明るし此村粉河寺の領地ありし寸  
觀音堂と新小建立し又丹生明神と紀氏神社  
の相殿を祀りて粉河寺に形と寫せし是  
丹生明神也の稱し舊紀氏栗栖神社と稱し  
是を此のまきみ至る是寛文記より古ハ免田十一  
町の是し是の神主ありし寸諸事を番頭六  
人の者ありし支配を祭禮六月十六日ありし撰社

八幡宮馬場栗栖の南毎戸乃其也いふ處あり  
是と便る後此の移りていふ當社の事其  
詳は各神社考定部より辨す  
○丹生明神社 境内周七十二間  
本社一間半 神樂所 末社 栗鳴明神社  
東栗栖の南一町許ありし東栗栖八軒屋の氏  
神ありし人當社と若宮ともいふ莊中古ハ西  
栗栖紀氏栗栖神社と氏神とせし紀氏社  
丹生明神と合を祀りし後莊中爭論ありて



東栗栖八軒屋別尔丹生明神と分ち祀りしる  
りむ若宮の名を西栗栖社と對せざる稱ふるへ

○小祠三社

惣社権現 社地周十八間  
八軒屋より

陶宮 社地周四十九間 稻荷明神八幡大神合祀  
西栗栖端小より陶宮七梅と云ふ其の形似る也

神名不知社 社地周二十四間 西栗栖村中より近  
世紀氏の後裔と云を紀氏栗栖神社

王系と謬る事と考定部小出也

○藩降寺

白鳥山 教王院

境内

東西六十間 南北六十間

真言宗古義高野山學侶櫻池院末

本堂 歡喜天堂 摩利支天堂

鐘樓 僧坊 鎮守社

馬場栗栖の巽尔より寛文記尔 景行天

皇の御宇日本武尊白鳥宛るきて南方小飛高

此地尔来玉ふ其翼 大よりて藩二流降

如し其後いつ迄の 帝の御時よおより

勅願所にて此地尔伽藍御建立所を依て藩乃

降迄系と以て藩降寺名多玉ふとるる古ハ

免田八町五段より永禄中諸堂悉く焼亡し久



一ノ額廢ル及一ノ慶安二年未至再興を什

物ル三條小鍛冶宗近乃所也

春日明神

○白山權現合殿一間 鳥居

八幡宮

寺の境内良北方山乃半腹ル所也舊ハ當莊此  
氏神也其按之所也根來寺此地と押領の時當  
社と建根來寺此鎮守白山と祭也當莊氏神と  
七一の所ハ一ノ天正六年根來山座主舟橋膳願

坊也其大川筋熱田六町餘寄附所也寛文記也

舊々白山春日八幡各社所也又穀屋也乃一ノ

寺也同一ノ焼夫と一ノ所也今也當寺鎮守の姿

也乃色也祭禮九月十二日

○觀音寺 真言宗古義京都勸修寺末

本堂 觀喜天堂 釣鐘堂

鎮守社

西粟栖西端往還ル所也當莊粉河寺の領也乃  
丹生明神と勸請也其時西粟栖乃東迫間といふ



地尔伽藍と建て粉河寺観音と寫上寺鎮四町  
五段と寺六天正の兵火と悉烏有也尔尔後此  
地尔堂と營ミて其本尊と安置と享保中寺号  
と許さる

○高倉寺

惠日山  
松壽禪院

禪宗曹洞派越後雲洞庵末

本堂

僧坊

鎮守二社

西栗栖尔河里 境内に曝井といふ河に井欄小  
万葉集三粟の歌と刻りてあり  
八雲御抄に曝井と記伊の國を  
註せしむるに後人附會せしむる

○栗栖寺

真言宗古義若山覺樹院末

馬場栗栖尔河里 舊ハ藥師堂也呼し之 後林清  
寺と号し入今の寺号尔河里

○浄土寺

境内周六十間

浄土宗津奈村藥徳寺末

馬場栗栖尔河里 境内高附地也河に本堂 方六間

○僧坊あり

○教蓮寺

浄土真宗西派和泉佐野教蓮寺末

○東栗栖の東尔河里本堂

四間  
五間

僧坊あり



○智天寺

浄土真宗西派若山真光寺末

八軒屋

○舊家

地士

栗栖六郎

寛仁の頃栗栖紀成實せいふものなり栗栖村

○小住

成實壹井大夫と号せし事藩士

直川栗栖

○平九

平九其地の

の刀祿職多し成實里民と率<sup>る</sup>直

川保久重名内松門乃地を開發し

今の松島の地なり

後洪水の為尔損して空く牛馬放食此地と云

○成實

承安四年

成實の子と國實といふ直川久重

栗栖下司職せり國實の子と實俊といふ系實

俊再松門の荒地を開發し弟範成尔刀祿職と

付屬を

實後解状○按をふ是れ先實俊直

栖尔移

實俊の子と松島彌次郎弘俊といふ弘

俊の子と左衛門尉弘實といふ弘實の子と勝

實といふ系勝實の子と六郎實行法名道實と

いふ安原郷を押領し其地尔居る印東又六常

基といふとの那賀郡豊田村乃地頭職なり

故河を其地を實行尔讓る元徳三年實行松



島村七次男千代楠九女與元正慶二年豊田村  
七其子犬楠九女讓元金剛山の城尔趣く元弘  
三年五月二日保田次郎兵衛尉宗頭生執藏人  
師澄等大塔宮兵を率ゐて安原郷に押寄せ大  
楠九々宅に放火此時下文等蓋く焼失豊田  
村関東下文安貞下文知状安堵下文松嶋村石大  
將家文治二年下文右大臣家建曆二年下文関  
東貞應元年安堵下文延應二年西信讓状同年  
関東安堵下文正嘉元年廣實讓状正應三年僧  
勝實讓状同年関東安堵下文元徳三年道實讓  
状同年安堵外題當國地頭等日本大小の諸神  
尔誓云連判して焼失偽事と證其人々  
又豊田村連判して焼失偽事と證其人々

綱大伴兼綱紀實茶沙弥行有沙弥淨妙大伴實  
村松島村連判姓名紀十代楠九沙弥道實紀時  
綱大伴兼綱沙弥行有畠山以下の人々元近將  
沙弥淨妙沙弥定宗和佐雅樂入道監國清  
小倉十郎左衛門尉和佐雅樂入道大楠九本領  
橋本新三郎六十谷又四郎入道  
栗栖當知行松島下文焼失其人々偽  
事足利家小訴元領地相違其人々安堵  
建武四年犬楠九弟千代楠九七子豊田村  
七讓元與元弘四年犬楠九讓状建武四年足  
實其人々入六郎左衛門尉其人々建武四年足  
利家七軍功の賞とて岡崎莊下司職半分



と宛行し弘文和三年又狐島安原加納地頭職  
と宛行し弘後其家衰廢十六軒其家元弘三年  
其號も今二軒ハ断絶し四軒あり家元弘三年  
年豊田村の文書元弘三年松島村下文紛失状  
康永元年同紛失證文六通岡崎莊の文書及岡  
崎満願寺別當職の文書以上二通あり承安四  
年實俊解状及郷士等連判添状建久三年實俊  
解状及國主下文及留守所符同五年直川刀祢  
職連判正慶二年道實豊田村讓状元弘三年

○豊田村下文紛失状本書ハ湯橋吉郎大夫家藏 曆應三年同  
紛失證文康永四年文書同年宗西岡崎莊渡状  
建武四年將軍家下文本書ハ湯橋吉郎大夫家藏 同武藏守  
國守ハ添状又國守ニ里下知状文和二年足利  
直義下文本書ハ湯橋吉郎大夫家藏 同三年下文正平六年  
七年直義下文の寫所里又栗栖家系圖の寫し  
と藏其文ハ皆文書より出せし  
○舊家 地士 林孫助  
其家傳ハハ其祖ハ武内宿祢の末流にて代



朝家小仕、建武の頃、林兵衛三郎實保、足利  
尊氏に屬し、文和元年、名草郡和田莊惣追捕使  
職に補せらる。南朝建徳元年、林三郎左衛  
門尉保實、故に已て南朝に屬し、文中二年  
南朝に和田莊惣追捕使に補せらる。實保十  
三代の孫、兵三郎天正中、豊太閣の爲に領地を  
没收せられ、海部郡吉原村に住り、其後當村に  
來り住す。

地士

山縣右衛門作

○舊家

其家傳へいふ、其祖は二位法印一葉といふ源  
三位頼政の三男、山縣大學頭仲家十代の孫、左衛門  
佐頼盛の五男、已に一葉の兄、小市郎茂政三代  
の孫、山縣三郎兵衛昌景孫三郎盛景、武田勝頼  
の屬し、滅亡の後、當所より來り、一葉の養子とな  
り、子孫世々當地に住す。

○舊家

其家傳へ云、其祖は和佐閑、城主島居壽法院  
入道時澄の孫、刑部丞時直、天正中







の時犬楠丸代參料免田五千坪と宛行を  
一年病所里と遲參尔久公存とハ神主數度使  
者と遣と一宅之今七度半の使所不八是其縁  
不主又児童と出以事ハ所及之紀不屢の軍事  
小依て児童と代里と以所と見初所也いふ昔  
与兒童婦人ると神佛へ拜參る所ハ必笠の  
縁尔薄絹と張と由今紙幣と切か  
所を所ハ天正比と改ま

○八軒屋

舊々人家あり一寛永十四年命して家を建しむ  
其初々家數八軒あり一故今ハ八軒屋と呼今ハ  
ふ此地若山大手口より列松の官道よて田井  
瀬の渡津と經て良み達と所と上方街道と

巽方列松道と經て那賀郡小倉莊岩手の渡津  
小達と所と伊勢街道と上方及伊勢路ふと  
み往來と所との親戚朋友必此地よ送迎也故  
小旅舎茶店多し



出島村

傳自麻 粟栖村枝郷

田畑高 二百八十三石二斗九升八合

家數 本村の數  
人數 同

八軒屋の坤三町尔河了當村舊荒地  
慶長十年開起 淺野家臣近藤筑後守の定書  
多有之殊尔川端路之用心惡敷候間新出島  
於相立者如斯相定可遣候一、居屋敷相免可申  
事一、諸公事同前之度一、田畑不寄荒起者三年  
八御年貢相免可申事一、四年、目五年、目八、一、半



成御納所可仕事一ッ六年目ヨリ定三ッ成御納  
 所可仕事右御定之通相違有間敷候成次等右  
 荒起其屋敷マツリ竹木ヲ植念之人可申者也  
 慶長十年寅二月近藤筑後守栗栖莊兵衛工  
 出島に南栗栖尔至りて南北尔通りて小高  
 少地方に工人西堤といふ豊太閣太田水責の  
 時名堤跡を以ふ

○薬師堂

境内周十八間舊より八軒屋の西尔所に  
 寛政八年此所より移れりて土人  
 蘆原薬師堂を以ふ

出島村

岩橋村

伊波世

十箇所分ち各小名あり

梶曾

高柳

出島

北

東野

宇田

峯

小路

中里

皮田

田畑高

千九百二十四石一斗六升七合

家数

百八十四軒

人数

七百八人

村の名義莊論小詳あり村居十箇所小分ち栗  
 栖莊東栗栖の東小在るを梶曾といふ梶曾の  
 巽四町許小所あり高柳といひ高柳の内巽の方  
 と前組といひ乾



組の方と後 高柳の良五町許小所谷と出島と  
 慶長十一年高柳 高柳の巽二町許小所谷と  
 北村と北村の南小接を所を東野と北  
 北村の坤四町許小所谷と宇田と北南六町許小  
 明の舊記宇田の街道と見也 宇田北南六町許小  
 文の其項の街道と見也 宇田北南六町許小  
 所谷と峯と宇田乃乾三町餘小所谷と小  
 路といひ小路の北小四町餘小所谷と中里と  
 以ふ村の南山小古墳乃跡多一誰の墳所所也  
 詳ふ所 村の西小東谷と一谷あり大石  
 小天平寶字三年や彫るあり三十

の年前浮屠氏の偽造なり

○高橋明神社

本國神名帳正一位高橋大神

境内 東西四十一間 南北七十四間

宇田の東ふ所祀神詳ふ所土俗當社と笛  
 不吹明神と稱し境内近邊笛と吹こと或禁也  
 今神名ふ所考ふ所小姓氏録云高橋連、饒  
 速日尊七世孫大新河命之後也又云笛吹連、火  
 明命之後也舊事紀小所谷に饒速日尊大明命  
 一人所祀と高橋笛吹の二姓と同祖の姓なり



想ふも古二姓の人此地小居て其祖神を祀り  
因て高橋社を稱し又笛吹社を号せしに土俗  
神名笛吹は稱を避て笛を吹事を禁てしし  
今も訛りて笛不吹明神を稱す所ありむら當  
社舊ハ今の地乃西二町許小河を其地今猶高  
橋を稱す今の社地も高橋に在てし時此馬場  
ありていふ森の西尔南北に通るは村の南  
ありていふ馬場の道趾今も残存を  
○小楠谷をいへる地ハ古の遊觀所といふ高橋  
の南小宮田をいへる田あり古乃御供田なる也

一古官知の神ありて盛なり事知れへ後  
世此地石清水の領地なりて八幡宮を勧請  
を氏神とすし其當社を衰へたり人神主岩  
橋氏あり

○里神社

境内周四十六間  
宇多の乾小所を明曆記に祀神九頭明神一  
十八善神ともいふなり古も毎年正月初  
午日宮座配の式當神前におあ執行不明曆記  
又當社境內を明樂寺ともいふなり明樂寺



八古の別當寺不長庵

○海神宮

左善八幡宮

間方二

中央八大龍王社

方四

○右善熊野權現社

一間半

瑞籬

神樂堂

石鳥居

末社

辨財天社

方一間

本國神名帳後四位上海神

宇田の北二町餘より八大龍王明曆記の中

の御前ありて土人當社とす不長の宮と稱す

りて此の海神の約にたれり土人又當社と

應和元年六月廿四日の勸請ありて以て傳へ

そり文治六年當莊鳥居禪尼此領地ありし時

熊野權現と村の西車谷に勸請に神社録亦相

間白河院御幸之時當社に奉幣ありて以て

こよに其説誤るる起りしといふ又附會成

應永元年將軍義滿公當莊を石清水小寄附て



瓦瓦因と八幡宮と海神の地と勧請し且熊野  
 権現と後し三社とを以當莊此氏神と此時  
 石清水と見八幡伊織介實重と當所の代官と  
 實重神主湯橋里明と石清水と請ひて神田  
 三十五町并み兒神子の田地社司左番頭二人へ免許  
 田二段餘つ石番頭へ一段は免田あり今田地の字は残る  
 慶長檢地の時皆沒收せられ以上社殿及岩橋氏系圖等と據る社殿  
 八天正以前兵火と燒亡と其後再建し本社末社  
 廳并殿鐘樓不動堂神輿殿寶藏大門神宮寺

等備と小兼應三年再烏有せあり後又再建

合の姿とされ天正の頃また八月十五

○日神輿渡御あり寛文記小楠谷ハ祭式と嚴る昔の遊觀所といふ

○里一里以ふ末社辨財天ハ根來此鎮守と勸請

此と以ハ明曆記曰古ハ是堂社ハ雨乞とと加多と畏延て祈るものハ兼應三年の大早日當社ハ雨乞と祈るものハ兼應三年の大洪水出く社又のこ

○天滿宮 社殿 五尺 境内舟二十四間

小名北の西ぬあり寛文記よ一郡一社の天滿宮



此の伝ふとあり

○小祠三社

藏王権現社 境内周六十間 宇田の東三町山

良左衛門佐義明 南朝に奉仕し 故郷よりか

へて明德三年 当社と吉野にて 勧請せしむ

社頭み柿の塞 神境内周十八間 許

古木あり 北村の東あり

八王子 境内周二十四間 東野の巽あり

○法照寺 浄土真宗西本願寺末

本堂 六間 釣鐘堂 僧坊

高柳の後組より 文明中湯橋 莊司法止庵と

○成善寺

浄土真宗東本願寺末

出嶋より 舊ハ那賀郡田中村より 寛延四

年此地より 移る舊西派ありし 文化四年東派と

○稱名寺

浄土真宗西派 泉州教蓮寺末

本堂 五間

六間

釣鐘堂

僧坊



小名北の西小あり開基ハ永正年栗栖村藤内  
大夫堂ハふ也の蓮如上人々帰依一薙髮して名  
と了西と改り永正七年栗栖村ハ高當寺を建  
立ハ元禄十六年寺號と許了色享保中此地小  
移也

○妙應寺

法華宗勝劣派駿州富士小山本門寺末

宇田の巽三町小あり國老安藤家墳墓の地ハ  
寛延年中題目此石碑をたぐ其後堂を建  
此地の廢寺乃彌を興一妙應寺と稱王寶曆年

中今の姿とかる

○真宗寺

浄土真宗西派若山真光寺末  
小名北小あり

○堂三宇

萱堂

高柳の西小あり高野聖念佛修行セ  
地ハ小ハ萱堂と稱ハ萱堂の事

阿彌陀堂

伊都郡學文路村の條小あり  
境内周二十間  
地藏堂 東野の南  
峯の南小あり

○舊白家

岩橋吉良右衛門

其祖ハ湯橋新大夫秦宿禰といふ兼一安建久乃  
文書小ありハ其先高橋大神鎮座の時より



官司と一海代々湯橋の莊を領知を文治六年  
 四月十九日湯橋莊を島后禪尼に賜ふといへ  
 とも湯橋氏舊小仍く地頭職たり元弘建武の  
 頃み至て莊司行有せよふとの栗栖領主六郎  
 實行の女と娶てく新大夫里永を生む是くは  
 先行者乃妹大和國吉良左衛門仗義明小嫁し  
 了吉良介里明を生む義明ハ吉良治部大輔滿  
 京大夫滿義ハ北朝ハ後新田氏ハ與て太平記南  
 足利直義ハ屬せしハ朝ハ是るり後又足利家ハ屬せ  
 朝の軍ハ吉良石堂とありは南朝ハ仕ふ○國造家の古記ハ岩  
 義明ハ志と堅くし

橋小次郎岩橋吉良介ハ里明ハ南朝ハ忠勤あり  
 南北朝御和睦の時此家小來り遂に里永の養  
 子とす其姓吉良と名し用て湯橋吉良大  
 夫源里明ハ彌久應永元年將軍義滿公當莊と  
 石清水ハ寄附を依く石清水くは八幡伊織今  
 實重と當莊の代官とい里明石清水ハ幡社務  
 の女と娶り當社の總神主として伊織今と同  
 一と莊中乃事を支配す士姓舊事記ハ日應永  
 岩橋並み來り社司職公文所を受里明の子と  
 多根末寺威徳院と兼職を

岩橋村



吉良大夫守明といふ法名了心吉良治部大輔  
僧蓮如茂歸依改宗して浄土真宗とあり  
其自庵法正庵と三十六坊の其一又具るといふ  
守明の子茂吉良大夫政守といふ政守此子茂  
治部今吉明といふ士姓舊吏事記又曰吉明の時  
根來寺の為ふ吉明の子茂治部大夫政守といふ  
没收せらるる  
寺政疑りくむ政守の子と治部吉政といふ吉政の子と治  
部五郎吉信といふ吉信又石門仇と號以慶長二  
十年故ありて當地と立退姓名を變じて坂口  
甚五郎と稱を吉信の子坂口傳兵衛兼安元年

○當地高柳の舊地小婦里岩橋吉良大夫里政を  
彌是と里代々此地小住を里政の孫里通り  
○其居地と後組を以て字と莊司屋敷といふ  
方小堀町に字小御門城堀城の前堀田垣内  
城垣内名門の家藏の文書元弘三年豊田村下  
文紛失状建武四年將軍家下文國守の下知状  
文和二年此文書四通を粟栖家の文書として粟  
栖六郎實行にり行有へ與ふ所あり又建武  
二年新田義貞より吉良治部大輔滿貞への書  
又今川了俊の書状畠山元近將監にりの下知



状又永享五年文安四年天文八年天正十年慶  
長二年の文書以上文書皆古文書部載

○古士和實高橋氏

國造家所藏永仁三年の記小高橋弥三郎と

ふあり又永仁の紀又高橋三郎入道元

此の文書和佐莊林宜村歡喜寺所藏永仁元年

後入道元の侍元の河元の記小高橋遺

國造家の侍元の河元の記小高橋遺

當此高橋元の記小高橋遺

○皮田

田畑高本村の内又籠

家數 五十軒

人數 二百六十七人

小名小路の坤山足小所元此山を鎌子東山

子村と元以ふ故尔皮田と鎌







南ハ和佐、山峯筋と限リ山東、莊と界シ西ハ岩橋、莊小接シ北ハ紀川と隔テ、田井、莊と界ハ其廣袤東西三十町許南北一里餘此地ハ即古の大屋神ノ戸の地ナリ  
大屋神ノ戸和ノ名鈔脱誤ナリ郡中村並下神ノ戸也ハ小名ノ所也稱宜村小上ノ神ノ戸也ハ小名ノ所也古ノ遺名ナリ  
 郷廢モ依ノ後和佐、莊ノ名起リ和佐ハ和田同ク彎曲ノ名ナリ此地古紀川ノ衝小ノ地形也其ノ名所也中世右馬、允藤原、實家相傳ノ領地也嘉祿年中故あり了冷泉、局

坊門大納言定能妻小讓  
 宮、局下村和佐ノ下南村ノ今稱宜村ト歡喜寺小寄附元應ノ頃ハ莊比領主ト藤原宰相也  
 以テ藥德寺元應二年接建武康永頃小内大臣法印覺信歡喜寺所藏系圖小據也ト以テ歡喜寺所藏建武五年院宜藥然也ト下村南村ト舊德寺貞和五年寄進狀也ト歡喜寺所藏康永二年小依ト歡喜寺ノ領也ト歡喜寺所藏康永四年ノ文書ハ南村地頭職也ト建武四年當莊ノ任山東助次郎範家ト以テ建武四年當莊ノ任名の内箕田村也日高郡河上莊ト子守三所權



現ノ寄附直川、莊田、屋村、森氏所藏、康永三年  
職小遠、江式部、太夫、以、人、見、又、其、近、村、の  
守護職余、金山、藤、内、九、衛、門、入、道、淨、爲、と、以、ふ、人  
見延文頃小、庄、の、地、頭、職、小、和、佐、又、次、即、賣、村  
心以、ぬ、あ、り、二、歡、喜、寺、所、藏、延、文、其、他、領、主、地、頭、の  
沿革詳小、知、所、一、から、以、此、地、紀、川、筋、の、移、轉、小  
後、地の、變、遷、も、頻、煩、を、思、は、る、布、施、屋  
一村舊、々、郷、を、以、て、稱、を、慶、長、檢、地、乃、時、當、莊、小  
屬、當、莊、屬、村、を、和、佐、村、下、和、佐、村、布、施、産、村、三  
箇、村、と、以、其、後、和、佐、村、分、て、中、村、稱、宜、村、関、戸

村井口村四箇村此、な、り、九、箇、六、箇、村、と、る、と、也  
其地利民一尔、岩、橋、栗、栖、等、の、莊、も、同、一

○和佐山

莊の、南、山、東、莊、と、此、界、東、西、に、列、と、乳、山、の、山  
東、莊、又、越、る、道、と、矢、田、越、す、以、ふ、熊、野、古、道、の、里  
熊野古道り、郡、中  
路程の、條、小、書、以

○宮堰川 事ハ郡中山川の條小載

○四箇井川事ハ郡中山川の條小載



○熊野古道 事ハ郡論路程部小載也

○宮川

○山

○山

○山

○山

下和佐村

志毛王射

田畑高 四百九十七石二斗一升六合

家數 五十五軒

人數 二百十人

岩橋莊岩橋村の内小名宇由の異五町餘小

和佐庄の下にありて下和佐名はく村居

南北分乳中間小石橋あり大橋あり



○八幡宮

境内 東二町半 西二町半 南五町 北五町

禁殺生

本社 一丈三  
五寸三 八  
社造 一丈

一廳

拜殿

瑞籬

門

御手洗

末社三社

仁徳天皇  
菟道皇子 合殿

武内宿禰  
玉童命

合殿

八王子社

村の南山足小所一  
村比氏神あり和佐一莊  
舊より皆高、明神と氏神と以後世争論ありて當  
村新に當社と石清水より勸請して氏神とす

此の地當社昔ハ社領五十石餘あり神事毎年  
二十六度所字神樂田、樂猿樂流、鎬馬等となり  
八月十五日より神輿渡御ありて此の地ハ不寛文  
訛ハ社殿と載てあり本社脇宮末社御供所藏廳  
觀音堂鐘樓瑞籬鳥居御旅所あり宮山一箇  
所あり毎年八月朔日と十五日とありて村領  
て殺生灸針と禁し死人を他村小送葬以各つ  
てて忌めし

別當

慈光寺 清涼山  
觀音院



本堂同方五 求聞持堂 鎮守 稻荷社

八幡宮境内小祠に真言律泉州大鳥山神鳳寺  
末舊々和佐山觀音と号り天和中今の号小改  
高野山の僧快圓といふ女の當寺の衰微を  
中興し又神鳳寺に位し其寺を再建し當寺  
の本寺といひ快圓高德此僧より 有徳大君の  
寵遇と蒙り江戸へ召さるるに以ぬ什物又  
寛徳尊夫人御寄附の品あり近年 一位老公  
親筆の清凉山といふ三字此額を賜ふ古碑三

基境内尔所見文字磨滅上小梵字所見下小

他磨 又古た鰐口あり應永十二年十二月吉

末寺一箇寺 多田郷且來村松尾寺其外古ハ末

莊口須佐村當寺と菩提寺と又寺ハ山東莊  
矢田村の過去帳あり舊檀越ありといふ村中  
舊家和佐森右衛門の家所藏の文書ハ領家文  
と別所觀音寺應安建徳等の寄進狀ハ一通あり  
其文中ハ王子前王子の別當職也源事見之  
今詳らぬ在る稱宜村王子権現此側ハ王子社  
ハ一系地ありと恐らくハ此寺稱宜村王子権現  
の側ありと別當寺ありと後  
此地ハ移せし小祠ありと見たり

○小祠三社

下和佐村



○

牛神社

南村小石に舊八村の南  
牛神山小石に

秀倉二社

並小村中より  
神名詳ならず

○元享寺

龍谷山

禪宗曹洞派若山林泉寺末

本堂

五間  
八間

庚申堂

鐘樓鎮守社

僧坊

南村の南山際より開基元享年中三光國師より後醍醐天皇の勅願所なりと云ふ古佛殿庫裏客殿衆寮小庫裏浴室東司山門等備に子院七箇寺あり  
西一方便院福寶坊樹慶庵保持  
庵光明院天徳寺淨福寺

寺領も九町餘あり應永天正の兵乱も寺寶等皆紛失し堂舎破壊し寺領も没收せらるる今存る所慶永禄中山林の券契あり又村中も天正十八年當寺年貢取帳と傳ふ寺の南に瀧あり故尔滝谷山と号す

○永光寺

浄土真宗西派若山真光寺末

本堂

六間  
七間

僧坊

北村の西小石に享保年中寺号を許す

○廢傳昌庵

下和佐村



中村

奈加

田畑高 六百八十石三斗三升九合

古家數 四十六軒

人數 百八十九人

○ 下、和佐村の東七町半小河に和佐莊此中央に  
とハ中村名に村中程々塚と云河に又田  
の字小廻と神と云あり

○ 小祠二社

中村



辨財天社

社方一間社地周十里神社村中小

○極樂寺

浄土真宗西派若山真光寺末

本堂

方五間

僧坊

村中小所至

○觀音堂

境内周十間村の良小所至石佛あり

○古士

江川藤七

慶長年中大坂陣の時福嶋源五郎と生捕淺野

家へ出川其後六十人地士とあり今其家村中

より或は出て仕たり或は他邑に移りたり

古士  
事記

○古士

西與助

古士姓舊事記小見之堂あり



福宜村

年表

福宜村 関戸井口小名

柗檀木 マノキ

田畑高 千二百七十三石五斗七分

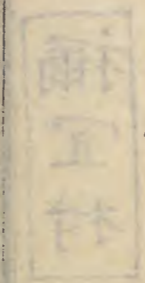
家數 百軒

人數 三百五十七人

中村の東六町許小所は歡喜寺應永乃文書小  
上和佐也乃乳ハ即當村所其頃村居南北又  
分所歡喜寺文書又南村也乃乳ハ南北小分也  
是乳時の南北方也指所是高社此福宜當村也



居所と以て禰宜村の稱起也又歡喜寺文書  
み字箕田村也ゆゆに今村乃坤小名三田と  
いへる是其地也里村中橋あり大橋也いふ宮  
堰川み架以坂本王子の巽二町許山足小磯一坑  
三つ角に何處も方四五尺の穴ありて深さハ  
量るにかり寸又金屋池也以一畝池あり池の  
側小銅滓を積上を古金と鑿一地也思ハる  
何處の時分る哉知らん



○高三所大明神社 境内 東西南北三十間 禁殺生

五十猛命

都麻都比賣命 合殿 方二間半

大屋都比賣命

瑞籬 鳥居

末社七社

帝釈天社 結神 山王社

辨財天社 惠比須社 塚主碑

栗鳥社



延喜式神名帳都摩都比賣神名神大月次新嘗

本國神名帳後四位上都摩都比賣大神

村の東和佐山北巔尔所<sub>レ</sub>和佐山一小高山といふ故小古<sub>レ</sub>高社又高宮又高三所大明神又高御前とも稱<sub>レ</sub>戸井口禰宜中村の氏神不<sub>レ</sub>古<sub>レ</sub>那賀郡小倉莊三毛村邊<sub>レ</sub>當社と氏神<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>當社往古ハ伊太祁曾神大屋津比賣神<sub>レ</sub>共<sub>レ</sub>今<sub>レ</sub>比神宮郷日<sub>レ</sub>前國懸兩宮の地<sub>レ</sub>小在<sub>レ</sub>後山東莊伊太祁曾乃地<sub>レ</sub>遷<sub>レ</sub>大寶

二年三神と分祀して都麻都比賣命ハ此山に遷<sub>レ</sub>玉<sub>レ</sub>三代實録貞觀元年後五位下勳八等伊太祁曾神大屋津比賣神都摩都比賣神並授從四位下<sub>レ</sub>乃<sub>レ</sub>其後從四位上<sub>レ</sub>授<sub>レ</sub>給<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>三神三所<sub>レ</sub>小分<sub>レ</sub>鎮<sub>レ</sub>坐<sub>レ</sub>後<sub>レ</sub>三所とも各其御神と中央<sub>レ</sub>祀<sub>レ</sub>外<sub>レ</sub>二神も猶<sub>レ</sub>左右<sub>レ</sub>祀<sub>レ</sub>故<sub>レ</sub>小當社と高三所大明神と稱<sub>レ</sub>寛文記<sub>レ</sub>古<sub>レ</sub>三社造<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>當社の事元禄年高積姫神と祀<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>辨<sub>レ</sub>詳<sub>レ</sub>山東莊伊太祁曾神社の條及神社考定部<sub>レ</sub>載<sub>レ</sub>祭禮

禰宜村

四十



九月二十日か里舊八十一月十四日火踏の  
神事あり日前宮神夏記小當社の神事正月十  
一月十二月と云ふ又西宮の社人及伊太  
祁曾の社人神事を勤るの事あり昔と祭禮小  
神輿渡御あり流鏝馬あり小元正兵乱の後  
皆廢と云ふ以ぬ元和以来廢を起し別當歡喜  
寺を罷了唯一小復せり迄漸々今の姿とあり也  
後鳥羽院及達智門院領家藤原宰相  
等諸家より當社への寄附状今猶歡喜寺に傳

之九に神主と神下周防ありぬ

○氣鎮社 境内 東西六十間 南北三十間 禁殺生

本社間方二 御供所 廳 瑞籬 鳥居  
末社惠比須社

村の東三町許和佐山の麓小なり祀神詳ら  
るを按ずるに氣鎮ハ假字より弦鎮を書と本字と  
可弦鎮と後世墓目あり云と同一義ありとの  
弦音より惡魔を降伏する所の名あり寛文記小  
此御神御装束と甲冑と御鎧魔主と軍と一玉



ふ時の御姿成祝を申にきて荒神よて軍神と  
申奉候や所里 寛文記村民の説をと比し小  
明神と成混同 然るに神名を定りたりと  
七は誤なりと 執りて玉ふ御姿よて弦鎮大  
と御手小弓なりと 其詳なりと考定部小  
明神を稱する所は其詳なりと考定部小  
出せし稱宜井口関戸布施屋四箇村の氏神なり  
里古より國造家にて高社と祭るなり其時此  
社前の楠樹と三遍画了て後山上小登候是を  
和佐乃三画なりと事ハ國造舊記より見えたり

今ハ此式絶えて神主と関弁内といふ

○妙見社 境内周二十七間

村の坤小なりと歡喜寺所藏康正二年の文書小  
妙見菩薩之御神事毎年九月廿三日なりと當  
社の事なる所あり又藥徳寺正應の文書亦此  
字又元明賢といふ所は當社の舊地なりと承へし

○王子権現社 境内周八間

村の南二町許小栗街道字坂本を以て小なり  
因て坂本王子と稱す社あり碑を建て和佐王



子の四字と彫む寛文中建る所といふ寛文記云和化王

子ニ社一八坂本より一八川端より古八別所観音

寺といへる所あり王子の別當職あり事如依

氏所藏應安建徳頃の文書小ありはる其盛る

事知れ今王子の東又別所谷といふ

所其地古観音寺あり所を人観音寺延文五年康

曆元年至徳元年永徳三年應安七年應永十八年永和二年建徳二年の文書和佐氏所藏あり

○小祠三社

木林社 社地周十四間村の北二町

天神社 社地周六十間村八幡宮 社地周三十五間

○歡喜寺 井谷山 境内 東西七十九間 南北六十六間 禁殺生

禪宗臨濟派若山龍源寺末

本堂 僧坊 厨舎 鐘樓

倉庫 鎮守社 四脚門

村中小あり此地古熊野街道より薬徳寺に

いふ寺あり高三所明神の別當職を兼ね元

建武正平康 曆寺附状 後歡喜寺といふ寺を合せて遂小

薬徳寺此号を廢して歡喜寺に改む薬徳寺に



玉峯和尚の開基より了嘉曆二年其別當職を  
孫太郎入道惠性小讓弘惠性と和佐莊下司小  
了累代其寺の事と支配を文保二年惠性別當  
職と空觀房又讓了文保二年惠性別當職讓狀熊野參詣の  
人小接待成るさしむ嘉曆中惠甄上人惠甄又賢心上  
人又別峯國師をいふ由良興國住職して專接  
寺開基法燈國師の法友なり了  
待と營む元徳二年諸家く了其志成助る了寄  
附田多し寄附狀今歡喜寺ハ寶治の頃惠鏡上  
人の建立め了京都小あり其時ハ蓮光寺と号

在尤衛門尉藤原範澄がしぬ人寺領を寄附を  
文永五年 文永元年又至る了 後鳥羽院  
惠鏡記 功門大納言 後鳥羽院御菩  
の宮女大宮局 定能の女  
授の為小光明真言護摩供比修行と惠鏡よ託  
一護摩堂を寺内小建立し其母冷泉局して讓  
受るし和佐莊の内下村南村と今の下和佐村  
護摩料小寄附を文永五年惠鏡記正應二年堂  
舎して小備了法會怠さば八局の歡喜淺から  
在因高蓮光寺の名を改了歡喜寺と号を寛文  
縁起



正應三年院宣と賜ハ至了御祈願寺とスル  
山城<sup>ノ</sup>田一町大和<sup>ノ</sup>田一町餘越後志度乃  
岐<sup>ノ</sup>莊<sup>大納言ノ領アリ</sup>等寄附田多<sup>乾元二年</sup>慈道橋寺  
家<sup>寄進狀</sup>附狀<sup>諸</sup>乾元二年寺主慈道房寺と大和橋  
寺<sup>ノ</sup>附屬<sup>一末寺トアリ</sup>乾元二年<sup>寄進狀</sup>卒堂と彼地  
小<sup>移</sup>元德二年<sup>寄進狀</sup>又元亨比大宮局既<sup>ハ</sup>没<sup>一</sup>て  
四<sup>過</sup>の姫宮<sup>大宮局ノ生</sup>及連智門院<sup>四過姫宮</sup>  
ハ御孫<sup>ハ</sup>等局の遺旨を續<sup>レ</sup>萬の事舊<sup>小</sup>と  
<sup>ハ</sup>に領所<sup>ハ</sup>押妨<sup>アリ</sup>土貢不足<sup>一</sup>堂舎の修

理<sup>ナ</sup>か<sup>シ</sup>死<sup>ニ</sup>至<sup>リ</sup>寺并<sup>ハ</sup>料所と藥徳寺主惠  
甄<sup>ハ</sup>附<sup>一</sup>後鳥羽院の御菩提と祈<sup>リ</sup>入接  
待<sup>モ</sup>怠<sup>リ</sup>る<sup>ハ</sup>死<sup>ニ</sup>至<sup>リ</sup>ハ<sup>ハ</sup>兩全<sup>カ</sup>らんと<sup>ス</sup>橋寺  
の僧徒<sup>ト</sup>連署<sup>シ</sup>て惠甄<sup>ハ</sup>讓狀<sup>ト</sup>與<sup>フ</sup>橋寺  
元德二年惠甄藥徳寺<sup>ハ</sup>伽藍<sup>ヲ</sup>建立<sup>シ</sup>藥徳寺  
と改<sup>メ</sup>く井谷山歡喜寺<sup>ト</sup>號<sup>ス</sup>井谷<sup>ハ</sup>寺<sup>ノ</sup>東  
歡喜寺<sup>ト</sup>也真言宗<sup>アリ</sup>此<sup>ト</sup>禪宗<sup>ト</sup>ス  
此<sup>リ</sup>屢<sup>ニ</sup>院宣<sup>ト</sup>賜<sup>リ</sup>及鎌倉<sup>ニ</sup>其地<sup>ヲ</sup>侵掠  
至<sup>ル</sup>事<sup>ト</sup>禁<sup>ル</sup>以<sup>テ</sup>諸家<sup>ノ</sup>寄附田<sup>ハ</sup>永<sup>ク</sup>全<sup>ク</sup>

祿宣村



其家事と得たり一に天正年中乃至堂舎悉  
兵火に罹り領田盡し没收せられ後再建して  
纒小古此形と摸せり慶長六年淺野家より寺  
領二石の地を寄附し當代此に襲り用られ又  
境内を免許の地と定られ寛文中由良興國寺  
に屬し法燈國師の縁今若山龍源寺に屬し空觀  
房嘗  
龍源寺に在り昔は塔頭六坊あり乾德菴正覺  
菴德雲庵大  
智菴興昌寺圓明寺責志菴菌村鳴龍  
延命寺に此子院を引きたりあり  
三尊と快慶の作といふ今藥師一躰のみ存り外

必觀音一軀あり舊の藥德寺の本尊なりん藥  
德寺の文書内大臣法印覺信法性寺藤原宰相  
等の寄進狀其外正應に觀應項より此文書  
四十九通過半寄進  
狀あり又高社文書正平の綸旨  
及下文以下康曆頃よりこの文書十二通歡喜寺  
文書文永年中に慶長頃までの院宜寄附  
狀足利尊氏及直義大内義弘畠山元近將監淺  
野家等の文書八十餘通あり大氏の二字と  
古文書部に載あり



○安養寺

龍門山 旭東院 浄土宗 鎮西派 智恩院末

本堂

方五間

釣鐘堂

鎮守社

僧坊

村中より開基ハ天文年中寂譽上人といふ

○藥王寺

妙見山 教學院

真言宗古義 勸修寺末

村中小あり舊と薬師堂といふ寶曆中寺跡と

許さぬ

○庵室

高明神の西十間許あり 若山大智寺隠居所あり

○古城趾二

村の東和佐山此絶頂高社の南五町小河至坂

道十二町平處周十八間許之禮と至南峯續

百歩許小又小城の趾あり平處方十間許康永

四年四月最初峯竜門山の戦ふ畠山家の兵此

城尔龍王に記す太平記云延文四條中

十餘騎と率し了紀伊國最初り勢三

了かハ屯居し了開之多ハ同四月三日畠山

入道道誓り舍弟尾張守義深と大将了白旗

一揆平一揆誼訪の祝部十葉の一揆杉原の

類彼是都合三万餘騎最初り峯ハ差向ら

勢則敵陣小相對し宅依山小打上

日まて進ま先つ巴り陣を堅ふ



此地甚高敞サテみして眺望尤宜し

○實盛塚サテモリ

村の南四町許矢田峠に西小所に碑面も梵  
字と彫む上人出送の時此塚を火振の初とい  
土俗出送る小々都に實盛殿サテモリの御訪トムラヒせし  
と唱ふ因に此塚を實盛塚といふ所を接  
る小實盛に早苗降サテアリの轉語を承へし早苗降  
明神に稻穀を守護は神にして伊都郡官省  
符莊等も祭るに故に早苗降の神と云來て給

ふと唱へて稻蟲と追退る兒文ありんこと  
ハ此塚に即其神と祭られし早苗降塚とい  
ぬへしと訛る轉じて實盛塚とありしなり

○矢田峠

村の南六町小所小栗街道あり麓に峠あり  
て坂道三町許に越えハ山東莊矢田村に  
至る故に矢田峠といふ土人ワニサカと呼ぶ  
と和佐坂の轉訛なり

○榊檀木小名

林垣村



村の乾四町許小の里家數三十軒許関戸井ノ口

禰宜中村と出合いて小名と家と

○辨財天社 境内周四十五間昔櫻の太樹あり

○地士三人 中筋彦四郎

代々和佐組の大莊屋にて今小十人格小命せ

○りふ

楠本長之丞

千田専右衛門

井口村

幸乃久智

田畑高 六百九十六石二斗九升三合

家數 八十軒

人數 二百六十一人

禰宜村の北六町餘小の里宮堰川北堰口舊ハ

當村小の里村名此と起所其名 後鳥羽

院熊野御幸記又見之と御幸記小日前宮御

奉幣の為當所小御襖所と儲一事見由村の東



又王子橋と以ぬ字あり比爾王子の窟也以字あり古此地王子の社あり一もや御襖所とハ其社ありの事あり一村乃北小名瓜畑一悠紀一芝堂一いふ處あり日前宮應永六年の神事記一不見えれ一古代理神幸れ處あり一遊一岐窪一堂一あり是あり一歡喜寺正應の文書一

○塞神社 村の良

○千光寺 妙高山 禪宗黄蘗派無本寺

村の巽二町小あり開基の僧を塩屋圓通といふ

堂 六向六 僧坊

○報徳寺

浄土真宗西派海部郡狐嶋村覺圓寺末

○村中一あり一舊一と村の良あり一阿彌陀寺といふ真言宗あり一感院大僧正祐證の開基也一以後法觀禪門と以ぬ一の改宗して報恩寺と改め今此地一小移一享保十四年又今の寺号一あり一を一む



○地藏堂

村中小栗街道小町に當村開發の人建立せし  
堂ありて甚古色あり今に至りて村民講を結  
ぶて地藏講を稱す

○舊田家

和佐氏

其祖と大伴孔子古十九代の孫助太郎範兼と  
いぬ當莊小住に元弘の頃和佐又次郎大伴實  
村といふものあり元弘の文書よりハル畠  
山守護のといはん太夫實範といふもの二百石

と領を實範の子と孫次郎實豊といふ根來寺  
衆徒の爲に所領を奪て依實豊の子と九郎太  
夫氏實をいぬ氏實の子半九衛門慶長年中大  
坂又一味を託と以て淺野家にて是代討つ弟  
九郎右衛門豊範初より大坂に與て因りて  
家督を相續け其子森右衛門實延元和封初の  
後藩士に命せられ其子成和佐大八範遠と  
いふ射藝を善くし貞享三年四月二十七日京  
都三十三間堂敬天に射る一晝一夜發の處の數敬天



總矢數一萬三千五十三本其中通り矢數八千  
百三十三本天下此數より及ぶものあり是より依  
りて三百石と賜ふ後又二百石を加秩

○地士 井口藤之右衛門

關戸村

勢幾度

田畑高 五百七十八石二斗四升一合  
家數 四十八軒  
人數 百九十七人

井口村の東五町餘あり村名堰關所の義あり  
一 歡喜寺文書より和佐莊字關戸村あり  
村の北三町小出嶋あり小名あり此間街道  
筋小橋あり裏橋といぬ又村中字小松原といふ



處は昔の紀川堤の列松ありて熊野街道あり  
一處ありぬ

○妻御前社

境内周十六間  
村中小河に祀神妻津姫命寛文記に宮三社作  
り五十猛命大屋津姫命と合祀と傳ふに人  
り其比にてハ伊太祁曾の社人毎年五節供  
ふ當社小來て了神事つて事終て高明神  
至て神舞つて了と云社前又黒木の鳥居あり

○小祠二社

楠神社

村の東端小あり榎宜村  
鎮社の末社也以ぬ  
氣鎮社の末社也以ぬ  
北名出鳴の

里神社

○正行寺

浄土宗鎮西派京智恩院末

村中小河に寛文記小云開基詳ららぬ慶長比  
順等といへる僧再興して寛永頃智恩院に屬

をせり本堂方五間僧坊

○正光寺

浄土真宗西派若山真光寺末  
村の南端山足小あり堂方五間







云 仁明天皇承和二年六月 勅如聞東海東  
山 西道河津之處或渡舟數少或橋梁不備由是  
貢 調擔夫來集河邊累日經旬不得利涉云云宜  
每 河如增渡舟二艘其價重者須正稅又造浮橋  
令 得通行及建布施屋備于橋寄其造作料共用  
救 急箱云云 陽成天皇元慶四年云弘仁十三年  
國 分寺尼法光為救百姓濟度之難於越後國古  
志 郡渡戸濱建布施屋施墾田四十餘町渡舟二  
隻 令往還之人得其隱便信濃國之原也云所  
不 七也云云 所の別尔所係かとおとふ云所  
屋 とて所云云 布施屋九町と行基の建事見  
寺 古鐘銘云云 布施屋九町と行基の建事見  
と 古按云云 小袖中抄引  
と 古按云云 小袖中抄引  
遂 小村名と云云 稱宜村歡喜寺舊ハ  
藥 德寺といぬ文保年間住職空觀房熊野參詣の人

小 接待と云云 諸家と云其志と助多て多く田  
地 と寄附と云云 事云云 布施屋の事史の文小據  
○ 古記事云云 此地の布施屋ハ或ハ文  
保 の時此事云云 死んも知る處から正平二年  
二 見左衛門大夫と布施屋郷の地頭職小補  
高 野山本菊 同八年布施屋郷半分須田左衛門  
院 所藏文書  
大 夫の兵糧米と云云 知行せし事云云 伊都郡  
橋 本町土屋氏 是小據云云 正平の頃と布施屋  
所 藏の文書  
郷 云稱して當莊又ハ屬せし慶長檢地の云云  
布 施屋村

布施屋村

五十四



てい<sup>り</sup>當莊小屬せしは既ん當村寛永以前も  
を民家今此村居るに東の方より一<sup>り</sup>ことく  
焼失して後今の地へ移して村の東一町小中嶋  
を以ぬあり戸數僅小五軒村の良堤の上街道  
小<sup>ニ</sup>坂といふあり戸數僅小七軒此所宮堰第二  
の樋あり坂の名ふは<sup>り</sup>起<sup>り</sup> **可**

○産土神社

境内周百二十間

山王八王子社

方一間

祇園牛頭天王社

方一間

○村の東吐前村界あり祭禮六月十二日九月  
十二日あり古と社領一町餘ありといふ舊  
記焼失して傳はりに當社鳥居前と南北小見  
通一那賀名草兩郡の堺と以<sup>て</sup> **末**社舊二社あり  
王社と合祀と天照太<sup>太</sup> **夢**妙幢菩薩今山  
神今祇園社小合祀に

○王子權現社

境内周十六間

○昔と村の西七町小栗街道あり今村中へ移  
を和佐の王子と稱に **寛**文記云和佐王子二社  
端より川端あり **一**坂本あり一八川  
堂いふと即是あり **森**古松多し



○氣鎮社

社地三十八間  
村の東三町小川

○正念寺

浄土宗鎮西派那賀郡小倉村光惠寺末  
村中小川

○光蓮寺

浄土真宗西派真正寺末

村中小川に開基を天文申河部源左衛門といふ

之の僧證如小徒にて戦死に證如其子源三郎

へ真白の本尊を賜ふ源三郎父の菩提の為

一寺を開基して阿部堂といふ近年寺號を許

す

林の東に鎮座す

○觀音堂

境内周五十二間

禪宗黄蘗派無本寺

村の東四町小川に堂及正保四片岡小兵衛

秀成公銘に秀成の知行所南龍公の尊牌

に境内古松一株あり南枝長八間許殆地

小着んと

庚申堂

堂地周二十八間  
村中小川







林合

圖書

書宮

新内村

吉田村

黒田村

此は中子二宮二様  
師岡正流

紀伊續風土記卷之十二

名草郡第七

神宮郷 迎岸能美也

總二十六箇村

新在家村

黒田村

吉田村

新内村

太田村

出水村

太田村 新田



三月三日  
八不束  
板合  
正拾八板



秋月村

鳴神村

小名 有馬皮田

井邊村

津秦村

有家村

北出島村

子平村

出島村

子平村枝郷

以上十四箇村を神宮上郷とす

中島村

新中島村

中島村枝郷

杭瀬村

村の内

岡島皮田出作

南出島村

神前村

和田村

坂田村

田尻村

紀三井寺村



内原村

毛見浦

船尾村

小名 河内濱新田

以上十二箇村を神宮下郷と云

神宮郷凡廿六箇村東ハ岡崎岩橋の両莊ハ隣ニ  
西ハ海部名草兩郡能雜賀の莊ハ接シ南ハ五箇  
莊ハ界シ北ハ栗栖莊と境ニ其廣袤東西二里半  
許南北半里許屬邑北の方十四箇村或神宮上郷

少シ南の方十二箇村を神宮下郷と云神宮下  
郷の中紀三井寺内原毛見船尾の四箇村ハ五  
箇莊三葛村を隔テ南ハ河内此莊東ハ井邊鳴  
神の諸山連直シ和田川南を流シ官堰川北流  
流シ田箇ハ灌溉モ海に便宜シ冬年曠沃野ハ  
シ亭五穀蔬菜一も生殖セテ海ハ於シ人民も  
自然富庶ルシト普通此村落モヤ、異ナルモ  
多シト以ヘテ市鄽販賣の習俗あてて淳  
風モこれシ此地の古を考ふるニ則古能野應







注論



四

神宮郷

上郷  
下郷









郷今廢して雜賀莊中野島村の小名大宅郷平  
村の餘下荒賀郷黒田村の餘下有馬郷  
辨以荒賀郷下に見ハ有馬郷餘下見  
忌部郷并邊村の餘下見ハ日前神戶紀三井寺村に  
六箇郷の地形ハ一國造家舊記ハ永永四年  
名草郡三千町或日前國懸両宮ハ寄附以之也  
其地ハ則當郷及五箇莊ハ地ハ一神宮郷  
の名是ト起ル其後五箇莊ハ地ハ他領之也  
嘉禎元年神領四至ハ文ハ載ス所ノ區域  
ハ則當郷の地ハ又文安ハ文書ハも官郷ト

七箇村之何レ也按古レ河寺藏ハ不レ所レ又安  
論ノ事ハ記シ享神宅郡令一圓為神領者中世  
云ハ此ハ文ハ巧マ神宅郡ハ當郷ノ事ハ也  
喪乱ハ依リ郷士多ク神領を掠ル天正年中  
豊太閤一挙シ悉ク没收ス是ト其地神領  
にハ遊ス以テ之ハ猶ハ兩宮以産神ト以テ郡  
別ニ産神を祀ス也此ハ皆後世ハ神宮郷  
出ス也其村ノ條ハ辨以神宮郷  
後世畧シ宮郷ト稱セ又属邑ト也  
箇村ノ中後世亡絶ス有馬村ノ一村分  
也鳴神荒内中島南出島北  
出島吉田杭瀬ノ類ハ也



故に慶長檢地の時に至りて村數二十三箇村  
上宮郷下宮郷を以て統名を以て其後三村分れ  
て總て二十六箇村となりて土地の變遷ハ郡  
の總論に詳ふべき事ありしをとりせし

○東山

井邊村の東にありて岡崎莊と山峯を界は

○花山

鳴神村の東にありて和佐莊と接し躑躅花  
多し

○船尾山

船尾村の北にありて毛見浦と山峯を界は



神宮上郷

新在家村

志芸射評計

田畑高 四百十四石八升九合

家数 四十九軒

人数 二百三人

雑賀莊中野島村の東十三町より旧宮新在家をいふ宮郷の中新在家に義不承へし後宮城畧しく稱せり古名徳勒津

旧造家建徳二年  
舊記蘇津郷之



又解津之書以今村中の舊日本紀  
家得津を氏とす跡も此所也 仲

哀天皇二年春三月癸丑朔丁卯 天皇巡

狩南國於是留 皇后及百寮而從 駕二三卿

大夫及宮人數百而輕行之至紀伊國居德勒津

宮是時熊襲叛之不朝貢 天皇於是將討

熊襲國則自德勒津祭之浮海而 幸穴門出於

德勒津即此地於此地紀川の下流子在る海

口也近き津渡の地なりし故に津の名なり後

河道南に遷り其地水衝に當るを以て邑居皆

亡絶次最後河道改まり水害やいて其地稍々

家居出来り新德勒津といひ又新在家といひ

ひいに天正十三年豊臣大閣大田城を水攻め

破られし時邑居も破却せし後再家居を

作りて今の新在家とされり

○德勒津宮

社地周二十四間

祀神神哀天皇 神功皇后 合祭 應神天皇

村の北二町許小町と土人八幡宮と稱次これ

新在家村

八



古德勒津宮跡舊跡なり  
仲哀天皇の留  
り坐し行宮の跡ありを以て祠を建て御神靈  
を祭りふは田地の字より得津を以て此地ハ宮  
より東四町許ありあは今社の傍に碑を建て其  
事を表す

德勒津宮遺跡碑

書紀曰

仲哀天皇二年

帝巡狩南

国至紀伊国而居于德勒津宮是時熊襲叛不朝

貢  
帝討之浮海而幸穴門其所謂德  
勒津宮遺址乃斯地是也古者斯地紀川之海口  
而航海者必由比所以有津名也後河道南徙民  
屋田畝悉没河底去今六百年所河道又從而復故  
處於是德勒津之故地稍々藁砦礫鋪蓬藿田邑  
既成呼曰新德勒津天正十三年豊太閤之攻大  
田城引紀川灌之築堤二里當其道者割野拂地  
物無孑遺新邑復殫矣乱平数年逃亡寢裏遂得  
復舊今新在家邨即是也年紀悠邈變遷亦如此



而行宮遺址民猶識而無失建祠以標其地歲時祀之豈非遺烈餘恩存民之深焉哉嗚呼古者邊徼未靖夷賊雜擾嗚呼煽動帝親遠征蒙犯颶霧以當矢石之危將埽清海宇為萬世建中太平也豐功未成竟崩於軍營之中雖遐阪遠裔芸夫漁豎之賤且愚未嘗不哀號而呼天也而况於六龍所駐奔走執役者乎若子若孫世々相傳追慕於畎畝之中者雖歷千祀又曷已焉其遺蹤儼然以至千今固宜矣世移地易渺乎滄溟度

為田疇村落今之海口去此殆二里許生於遷渝之後長於無事之時者唯觀其原田肥美民物富庶也已非斯遺蹤之存誰知其然也哉我公命建石以表帝之遺蹤臣好古謹奉命命記其土地變遷之由以告後之人  
天保三年歲在壬辰夏五月  
仁井田好古謹撰并書

○王子權現社

村中好古

○信樂寺

淨土真宗西本願寺末



本堂

僧坊

釣鐘堂

○村中小あり

○封埃

知納村の界官道より道東西に違し列松あり  
道北を知納領とし南に當村領と成り  
と東北八田并莊新村の封埃に至り一里  
之次南八庚申堂封埃に至り一里と成り

黒田村

久呂太

田畑高

六百二十石五斗三升

家数

四十四軒

人数

百八十人

新在家村南五町并何れ黒田或ハ畔田也書

以又村中結田ハ字畔田何れ村名土色に依り

名法く系始り人 出雲国意宇郡黒田驛あり風

ハ同此水也或 村居南中北之三所并分也南黒

田成永村と以中黒田其北より北黒田中結



丑に巧し為此地を月藏院と云ふ国造家舊記  
中見月藏院ハ禪院の名今寺廢絶し中黒田  
 殘り月藏院ハ舊忌部郷也巧し中黒田  
 の内處々太田城水攻は時の堤今遺也又  
 村の東出水村は界に切戸口也以不處巧し水  
 攻は時堤の切也以不  
良加といへるあり古は荒賀郷の名此地は殘  
れり

○里神社

境内周四十二間  
 中黒田の東ノ端に巧し又申言は社も以不

○蓑島

中々北との中間字高塔おあと出れ国造家七  
 瀬後所の第三なり古此地川邊なり故後禊  
 の地也おれれ今ハ地形変し何也と田野  
は中々おふ七瀬後所の事日前宮

○願立寺

淨土真宗西派大坂淨光寺末

中黒田西邊小何と境内に愛宕社巧し近年  
 一位老公親筆の龍昇殿をいふ三字の額を賜ふ  
 ○廢寺二箇寺



金剛壽院趾

中黒田里神の西小あり黒田堂より東草集  
小見中国造家永仁舊記小領田若干見元より  
先年其趾より佛像二軀を掘出せり

東草集に載り文

知識文 黒田堂也

紀州神宮 金剛壽院鐘 知識文

金剛壽院勸進沙彌妙生敬白

請殊蒙十方檀那助成鑄造洪鐘狀

右當伽藍者釋迦如來利生之靈場彌勒菩薩  
護持之精舎也釋尊一代教主入滅春過今梵  
風漸<sup>カ</sup>出慈氏三會導師出現曉遠今覺月未照  
本尊之利生本願之志趣良有以哉抑為此地  
體也孤島峙西長河流北道場夜靜月頑伽耶  
山之峰<sup>下畧</sup> 乾元二年八月日  
月藏院趾



*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

吉田村

興志天

○吉田畑高六百二十九石四斗四升四合

家数二十二軒

人数九十九人

○黒田村の西四町許不何西、方畑屋敷町を去  
る、小之三町許不何国道家舊記小秋月村に  
出島なまと何不何吉田或ハ葎コシ田ダから入村申不何石  
原岸の上不何以不何字あり此地台川邊不何葎  
葎不何類生た不何地不何と一不何を秋月村不何と開不何堯也



しふらん

○里神社 境内周四十間

村の坤方小祠に申言社といふ社地古樹鬱

々々

○野乃遣戸 西四

村の西二町許に国造家七瀬後所の第二

ふに碑建と名を銘を土人ハ後戸といふ

○法輪寺 真言宗律古義在田郡垣倉村醫王院末

吉村中乾隅小あり舊在田郡石垣莊垣倉村小

又享保申ありに遷る境内聖天堂あり又八幡

小祠あり此八幡ハ先年大水時流來りしを

村民拾ひ挙げ後寛保申あり祭る

○圓滿寺 法輪山 洋土宗西山派梶取村總持寺末

村の申方三町許岡領新内申野島界小あり舊

ハ山東莊口須佐村にあり享保申茲に遷る

○妙祐寺 洋土真宗西派和歌浦性應寺末

村中にあり天文申開基といふ



新内村

阿呂智

田畑高 八百五石九斗一升二合

人家数 若山の数は籠をり

人数 同

吉田村の坤方に出る新内領は北は中野島界

よと南は平領と界を接する人家在り

皆若山の區域に入り戸口市籍を編在せし新

内或安楽内之書一本慶長 或ハ荒内之書以

舊国造家 何れも假字なく本義に非ず新内ハ新



地ふし此地紀川の末流よて下濕の地ふし  
 に河道改て後新に墾闢せし地ふれを  
 近年若山城下よ入る所名を改め新地と  
 此村傳馬所ふ城下よ四方よ至る驛の始  
 東ハ那賀郡清永村北ハ山口莊里  
 村南ハ神宮下郷内原村よ至る  
 納良瀬 区域周三十二間  
 人家の東端江西寺の東ふりて七瀬後の第一  
 碑を建てる名を刻む域内小里神の小祠あり

太田村

於保太

田畑高 千二百二十九石五斗四合

家数 七十軒

人数 三百十四人

新内の東八町黒田の南二町ふりて土地平曠  
 ふし字名義社の流うり明ふり村中に東西に  
 街道あり道の南に南太田北を北太田といふ  
 當村領の東北鳴神村と接界の處に一軒家を  
 いへり今二軒あり並む鳴神村



又六七軒を建亭今ハ一簇の人家と承れ也  
 也猶舊名に依て一軒家といふ此邊古老人島  
 又永沼郷といひし地也其國造舊記小出川  
 ○弓天神社 境内周八十間  
 村の坤三十歩許小町也天正以前郷中の士  
 此に射技を講ふ故に弓天神を號し古松二  
 株あり  
 ○里神社 境内周四十間  
 村中の西邊にあり土人内天神といふ弓天神

亦對する稱ふ此兩社天満宮を祭るに  
 うち  
 ○神畔森  
 村の南三町許あり又田宮といふ古日前國  
 懸兩宮の神酒を造りし所也應永六年神事  
 記小茲めて御種子下祭御穂上祭あり此地  
 種を蒔く其穂ふく両宮相嘗て御酒成作る也  
 いへり古ハ此森と社地の内ありなり  
 廢紀三所社



伊達志摩静火三神を祭るを紀三所といふ  
国造家舊記に此地を祭る云と或書次今廢  
絶せり寛永記に三尺四  
方板葺とあり

○平等寺 普門山 慈眼院 真言宗古義勸修寺末

北太田の西邊にあり本堂護摩堂愛染堂釣

鐘堂鎮守二社

○總光寺 音浦山 大満院 真言宗古義勸修寺末

村の南若山より日前宮及山東莊の街道より  
了小牧御陣の時此寺主郷士に使せし御陣

中に至りしこと可く詳し下は城跡の餘り見  
ゆ其項ハ東の方音浦の近邊にあり後村中ハ  
遷り延享四年今此地に遷り本堂毘沙門堂  
釣鐘堂鎮守社あり

○觀音院 真言宗古義栗林明王院末

總光寺に西に並へて本尊妙幢菩薩 長一尺三寸許坐像

甚殊勝の古佛あり妙幢菩薩の事金光明最勝  
王經に云く夢申金鼓を撃て凶夢を吉夢に  
変せしむる誓願あり俗小因く夢妙幢也



いふ此寺元鳴神社の社地は在り別當寺は如  
くふと一に享保中鳴神社唯一に復せしれ堂  
舎は栗林明王院に賜て其近邊の觀音堂  
屋敷へ移しむ其後又此地は遷り社地は在  
り時ハ威徳院といふ或ハ傳ふ本尊妙幢菩薩  
ハ泉州堺宝地院の本尊  
ふと一に兵亂の時宝池院阿闍梨圓存守護し  
て高野へ逃れ慶長十七年鳴神社に來りて觀  
音堂に安置せしありといふ本堂僧坊鎮守社あり

○來迎寺

淨土宗鎮西派津秦村藥徳寺末  
村中にある

○玄通寺

淨土真宗西派大坂淨光寺末

村中にあり開基明應申太田太郎次郎後善勺  
といひし者あり顯如上入書簡二通教如上入  
書簡一通現藏む

○廢堂三宇

大日堂

村の辰方日前宮森の西邊にあり寛永の比ま  
く貞福寺といへ陳日前宮に社僧寺あり其後  
唯一のありて寺廢し享天日堂に遺れり元



禄申海し其の堂跡東方神宮寺其境内に遷し  
て今其跡小高に空地とされし○坂田淨土寺  
の古文書に抑依為先規之所例淨土寺ハ貞福  
寺を取宿所金剛室寺ハ神宮寺を取宿所云々  
太田堂

国造家永仁舊記に見たり領田若干町見し  
少いふ  
毘沙門堂

○国造家舊記に見えたり領田若干町見しといふ

○城址

今の村居大體舊に城地なり其の方に大子門  
の址あり此城天正四年郷雄太田源三大夫築  
く所といふ国造家説小六十四代国造後連延徳年中築く此邊都く  
日前宮に神領ありしに戦争の世となりて邑  
豪縦尔所々を押し領し互に相争ふて侵掠する  
ふや止時ありし雜質黨志ハく太田城を奪へん  
を以て太田小勢ありて自立することありハ毎  
ふ根來寺に衆徒を頼みて援とせり時より織田



將軍信長屢本願寺を攻め、之を意を得たこと  
あり、ハナ本國雜賀黨外援を不次、由る城以  
て雜賀を討て、其巢穴を拂ふ。本願寺計り易  
かり、入る天正五年、織田左兵衛尉及佐久間甚  
九郎を、て來て討しむ。太田黨を、其郷導を不  
せ、申ふと、太田左近中津城雜賀、莊中野島、村の城ふに於て、  
先登して、雜賀權太夫を討取し、其ハ雜賀黨大  
敗也。主將鈴木孫一降参次。織田氏よて賜ふ、敵狀あり  
れよ、太田雜賀暫く和平を、りせり。翌五年五

月、織田氏より、本願寺城攻む、に於て、雜賀  
又、後き、本願寺に属し、太田を相分れ、争隘ま  
た、起、雜賀黨南郷中郷岸莊等、其兵を合せ、  
太田城を圍いて、攻る。こと一月餘、城堅く、て  
抜くこと、何とハ、次和議を、のへて、去る。天  
正十二年、小牧御陣の時、井上主計頭を御使、  
して、海部名草の郷士、小御味方、任る。へき、昔  
御内命、り、郡中、其郷士、命に應、る。治者三十六  
人、血判連署の書を奉る。



太田村

太田左近

同

太田源次郎

同

太田三郎次郎

同

太田太郎次郎

同

太田源五郎

同

太田源十郎

同

太田源三大夫

同

太田三郎右衛門

同

太田善五郎

同

太田真福寺

黒田村

黒田喜内大夫

吉田村

吉田右衛門作

吉田村

吉田孫大夫

秋月村

村垣九郎助

秋月村

村垣總次郎

秋月村

村垣甚五郎

有家村

堀内共六

同

堀内左助

植松彦次郎

有家村

戸口共三

同

戸口甚三郎

同

有家善右衛門

北神前村

島村掃部

中島村

島田新三郎

川村新三郎

山本熊之助

若村萬助

坂井村

藤田六郎右衛門

栗村

藤田長藏

岡崎村

岡崎三郎大夫

同

平尾左近次郎大夫

栗村

土橋平次

平井村

鈴木孫一

栗村

栗村幸佛

山東

大河内外記

鳴神

森源三大夫

右三十六人の内藤田長藏まゝ二十九人ハ  
舊記丹志系所ルし岡崎三郎大夫以下  
七人ハ諸家系譜等取と出れ城補ふいま  
しそ信ル然否あるを詳ルせは又根  
來秋之坊泉識坊寺五人一味同心ルし合  
勢と四十一人於てとて以事

敵地通しを以て太田村總先寺に住僧を



行脚の體小志ふし書を袈裟の内よ縫入れ道  
 路恙なく達しりきハ 神君御喜悅有らせし  
 も泉州岸和田より攻上るへしとの御報書あ  
 り僧おは朽葉色の小袖一領を賜ふ即御書を  
 行杖の内よ隠して歸るりきハ一統日前宮に  
 廣芝よ會集して并見し各出陣を急きりき  
此御朱印御報書根來泉識坊に預りしに  
 根來寺破却の時泉識坊逃去りて土佐國に  
 死に其御書土佐入此手にありしを遙か後  
 本國漆村能阿彌長左衛門といふ者とこれ土  
 佐より得く渡邊藤左衛門といふ者と謀る三

十六人此内の姓名を削りて己等の姓名は加  
 へ國老安藤氏へ出しりき三十六人の者此  
 子孫よ其偽り行りしを許り此の寛永八  
 年鉦阿彌追放せらる其御書藤左衛門の手に  
 ありし後官府に藏らるいふ同時は保田  
 花王院寒川等へも御朱印御書を賜はるこ  
 元禄年中白命有る事此事豊臣家も聞え  
 江戸の官府も納む事此事豊臣家も聞え  
 是れハ岸和田城番中村孫平次一氏及黒田官  
 兵衛長政をしていふは徳守志む紀州勢岸和  
 田を攻り一戦小勝利を得しりハ中村ハ城を  
 去り大木山へ退る此合戦は因り豊臣家を  
 黒田長政も感状を賜ふ武  
 家高名記ふ追て堺邊海へ放火し直り大坂  
 見えたり



小進まんと勢し所も小牧表御和談所より  
ハ千石堀積善寺濱佐野澤の五所に要害を構  
へん衆を籠置き其餘ハ本国小歸陣し其盟  
十三年豊太閤根來討ち国中を平せんと以  
三月二十一日羽柴秀長同秀次を副將軍とし  
其兵都合六萬餘太閤記ハ和泉路より根來  
不向ハしむ先陣既も千石堀濱佐野の城を破  
る積善寺澤の二城堅く守り降らば秀長盟  
書を興へしりハ城を明く各本国不引退を長秀

よも澤城中に興へし盟書葉勝寺村波多野次  
即左衛門の家藏む今轉し太田某の家  
巧り積善寺城中に興へし盟書比同二十四日  
写的場某家より本紙ハ散亡比  
大軍根來より攻入り堂塔伽藍一炬不焦土と云  
次此一段根來寺これより諸城を屠り之聞え  
しりハ太田左近を謀主として太田一黨並以  
不連署の輩大抵太田城に馳せ集り其勢都合  
一千餘騎男女を合せり五千餘人と注左近  
衆母吾て曰此城僅も方二町半也小城なりと  
隍深く櫓高く築て要害に構きれハ大軍を引



受く一戦せん小何の不足る有へ能野八莊  
司後詰の約とあるハ不日に到着必定せし其  
上去年連署の誓紙ふし豊臣家小向ふて弓を  
引しふとけきハ今更大軍を恐て降参せん  
こぞ勇士の義に非は唯城を枕し死を潔く見  
せ思ふハいふ事と何そりきハ皆々然るへし  
とそ同じける此時頭如上人本願寺貝塚へ移住  
しりれハ太閤入をて紀州ハ上人因縁の因  
なれを降参の儀を勧めらるよをいハしむ上

人即鈴木孫市にかくといい合め申村孫平次  
之兵此事を城中に諭さしむきと城兵従  
ハ其山々於て先陣堀久太郎二陣長谷川藤  
五郎各三千餘騎と馳向ふ城兵田井瀬と埋  
伏して先陣ふハ川を渡る所を弓鉄炮を以  
て散々小戦いしハ名ある侍五十一人を討  
取たり太閤下知すら城兵ハ死シモ狂ふきハな  
まふふ出れを攻めハ味方若干を損せん水  
攻めせば目翫メクラともあるへし之同二十一日  
説



八日 二十 遠尔城の田三町を隔く、大堤を築  
き東一方を開き、南北方ハ日前宮の森を斜  
に貫きて音浦山ハ属し北ハ吉田黒田出水よ  
り田井瀬堤尔属し都合堤五十三町と以ふ高  
二間と三間平根敷十八間入夫四  
十六萬九千二百人所用ふといふ 三里許上  
ル紀川を堰く宮小倉の両堰筋より水を灌  
ぎ四月朔日より漸々小水入來り三日より大  
雨降川、于俄々一面の泥海となりこれハ寄  
手江大将中川藤兵衛大船数艘ヲ取棄り弓鐵

炮小くまゝに攻寄しかハ城内を無て待設  
し事なれハ、先途と防ぎ、海内より水  
練然者城の敵の船底小丸を築り此ハ俄  
に船中水こしやふり寄手江周章斜り、以て  
ふく溺死を免れ、者ハ鐵炮より殺され敵  
々不れり引退き海賊尾崎吉兵衛数百人を  
率て花や万舟甲冑を装ひ城近く棄置りて大  
音に悪口し城兵を誘き出さん之謀りしに持  
口の大将太田源三大夫鐵炮を取らむは城撃



つ何や海に次其丸吉兵衛と申して船底に倒  
せぬこれよ其後ハ寄來る者も無く唯次第弱  
きを待たざる城中猛しくいへる力を  
ふへ起所も此を要害と魚鼈の窟壘の棲  
とふもこれハ英氣日々に衰へて謀を出さむ  
所城知らば折節連日雨止下流水勢日々に増  
えりきハ九日酉刻小至そと東の方堤潰えて  
堤切所百五十間黒田出水両白浪山崩せり  
村の界にたり今猶切戸とふ如く幸喜多秀家  
の陣營小衝激せしかハ陣中

大小擾亂して漸死の者数を知らば堤の切所  
深淵となりて俄小堰留むへき術なし土俵六  
十餘萬を用ひて数日おしと漸々本城如く築  
おせりこれハ城中ハ守るに疲乏寄手も攻  
るおつるもこれハ蜂須賀彦右衛門前野將右  
衛門の誘ふに従ひて暖とふも城中男女残ら  
ず助命巧りへしとの神文城得と書紙並禁制  
田村往太田某城内聚り勢此内五十一人の首  
家小藏せり斬と初五十一人討取し償不出し同二十四



日城を明幸て立退りて此事遠近小聞えりて  
八国中は諸城一時に雲散して皆空城となり  
ぬ太閤の此舉兵法は所謂声を先ふ者なり  
も之福嘆き者多うも城中は首五十一級  
三所小埋む今吉田村の西北小一所南中二所  
一所小十七級は埋むりては土俗十七塚と  
いひ傳ふ軍敵して後太田一黨皆太田に歸往  
以封初其巨孽を擡擡く藩士に列せりぬ

○舊家

太田嘉左衛門

南龍公の時六十人地士に命せられ代々當  
村に往き



出水村

傳美豆

太田村新田

田畑高 百四十七石四斗一升

家数 二十七軒

人数 百三十三人

太田村の良田四町許黒田村に東二町許ふあり  
古此邊老人島永沼郷ふといひし村地なりし  
よ水害に罹りて荒野とふなり後太田村をり  
壑開しと人家少々出来れり今田の字よ川原  
石原ふと巧見古の地形見らへし慶長の北三



葛村々々南六左衛門を以ふ者來りて大に壑  
濶しと遂に家を起せり 此家今ハ衰へしれと  
も人家ハ多くなれり  
村、乾方田中に涌出る清水あり水旱より増減不  
し近邊の田亦を沃けり出水は名是より起れ  
り

○歡喜寺

淨土宗智恩院末

村の乾方より寺地ハ六左衛門開祭にし  
寺も亦六左衛門の建る所一家の菩提所あり  
今ハ一村の菩提寺とす依土地ハ黒田村に屬

を

○地藏堂

村の巽より寺人ハ庚申より以ふ舊  
庚申祭祭せり



秋月村

阿我豆我

田畑高 六百六十九石九斗七升

家数 九十三軒

人数 三百六十一人

太田村の東十町許より名義詳ならず此村

之鳴神村との申間に古ハ新免郷といふあり

今廢して其地西村に領とあり国造家舊記并

出たり

○日前宮



○国懸宮

両宮の事繁多尋常其例を以て記載し、  
別冊書して二巻として下に所載す

○小祠二

里神社

社地周三十二間村の南に所奉  
神を祀る少い

里神社

社地周三十二間村の北二町許小  
あり御園社ともいふ

○溝内

日前宮森の北一町許字後戸といふ所あり

七瀬夜所の第五より碑を建てる名を勒す

○神宮寺

日輪山  
釋迦院

真言宗新義根來律乘院末

村中日前宮森の東にあり日前宮中古兩部

あり時東に神宮寺西に貞福寺ありと両宮

本地佛を安置し兩宮へ奉仕せり兩宮北古

圖を閲ふに經藏權現堂護摩堂あり元和の後

命ありて兩部習合派一洗して古尔復を是と

て貞福寺ハ燒して神宮寺ハ猶遺るに境内に

大日堂ありこれ貞福寺の本尊派移せりなり



中庭シメレ軟條櫻ナツラあり花時賞をへし

○耕月寺 龍鳳山 禪宗臨濟派宗妙心寺末

本堂 九間 六間 觀音堂 鐘樓 四脚門

村中小巧を開基詳りし以永正の頃より曹洞

派より天正に北より八耕月庵をいへり元和

の後若山吹上寺圭瑞和尚來り住し中興次

圭瑞 南龍公に寵遇を得し僧より親筆の書

簡紙賜はりて今に秘藏す末寺四箇寺あり中村

正念寺 田尾村 田徳寺 和田村 地藏寺 吉禮村 正蓮寺

○善應寺

禪宗臨濟派海部郡由良典國寺末  
村中小巧を文政九年海部郡門前  
村に寺あり移り

○正念寺

禪宗臨濟派耕月寺末  
村中に出り

○麁寺二箇寺

觀徳寺趾 井邊典徳寺末

修善寺趾 國造家建徳永和寛正寺此書記  
出口又同家永仁旧記并部賀堂飯

垣堂あり長録の旧記并薬師堂あり今皆廢瓦

牛塚 吉野塚

牛塚ハ後戸北東にあり吉野塚周十其良にあり



二塚とも何れ謂ふも城知られず

○城跡

日前宮森の東耕月寺の西より文明中国造  
後建築し所青侍飯垣周防守居城といふ今田  
地の字は城の内矢倉下城堀飯垣といふ

○地士二人

秋月三四郎

秋月久兵衛

鳴神村

奈留迦美

田畑高 千二百七十九石八斗三升一合

家数 百十軒

人数 六百六十人

秋月村の東二町小町に国造家舊記亦忌部郷  
の出島ありて以ふ村は名義ハ神社考定部鳴

神社考小詳あり

鳴神社

境内

東西四十八間  
南北六十四間

禁殺生

本社兩殿

各表

妻四尺三寸

兩拜所

各九尺  
七尺



廳

御供所

瑞籬

鳥居

二基

清淨池

末社九社

夢神社

三尺四尺

天照大神宮

春日社

延春明神社

住吉社

稻荷社二社

風神社

八幡宮

延喜式神名帳鳴神社

名神大

月次

新嘗

相嘗

本國神名帳正一位鳴大神

村中ハ何ハ一村の氏神なり當社本國式内相

常四社の一にして最尊し三代實録ハ貞觀元年正月二十七日授紀伊國從五位下鳴神社從四位下ハ何ハ後階を加へて正一位にのほり給ふ鎮坐は時代詳ならずは日前宮舊記ハ中世國造家より神領若干城寄附し大禰直を補任し祭祀等ハ神官は内行事を代官之次是を鳴神行事といふ其後天正前後の事考ふへ此事於し慶長の頃より社僧は如き者兩部習合は祭を承へ來れり享保年中官命ありて兩部



を一洗して古典より復し本殿雜舎に至りて  
悉く修造せり之神領五石を寄附し新に神職  
を命せり此に祀り日前国懸伊天祁曾神と  
相列すといと尊き御神あること再いせし知  
れむたは祀神古傳滅失へり按ずるに国造家  
舊記に鳴神村ハ舊忌部郷の内とし康富記紀  
州鳴神社氏人楯杵を造進は事巧も本国に上  
古々も忌部氏あり事古語拾遺に詳なり此等  
も因りに忌部氏に祖神太玉命を忌部郷中鳴

之に小地小祀す其氏人奉仕し 朝廷も  
殊に尊ぶ給いて相嘗祭に預らせ給ふ祀也  
地の名をよて鳴神社之稱し來て爲るへし  
猶其詳ある事ハ神社考定に部に辨せり且祭  
祀雜事等古書に載りて下り列す

神主

武川右近

今集解の文中日前云々鳴已上神主等の文  
にハ上世ハ別小當社の神主あり其後国造家  
に属せしは天正兵亂の後其家衰微し慶長の



項々社僧祭祀を恣にせしに享保年中官  
 命可了社僧佛堂等を境外に移し新社殿  
 造営此時村申ふ神職の筋自は者を擇ぶ  
 當家或神主之定め給へ其後代々神職是  
 祭祀奉幣等  
 神祇令云仲冬上卯相嘗祭集解云大倭社中畧  
紀伊国坐日前国懸  
須伊太祁曾鳴已上神  
主寺請受官幣帛祭  
 国造家舊記云十一月上卯日鳴神社御祭惣官  
 在職之間一度參詣行事一人代官也曆應四年  
並應永六

年の記に  
見えし  
 同記曰十月調庸祭下旬撰次御捧物者土師申  
 御先御捧物者兩宮申言二社伊太祁曾須佐妻  
 大屋鳴神等分也  
 同記曰二月六月以布為幣有四彼布一端内半  
 分進伊太祁曾鳴神社  
 同記曰正月七日白馬次第云々三匹献鳴神社  
 權内入大案主間一人為使以正應永六年の  
記小見えし  
 同記曰大神宮恒例調ウ庸御祭調へ物



の事鳴神の宮絹三匹琴下ノ系一約

雑事

中原康富記永享大嘗會條云兵庫寮神楯稗立  
之件楯稗紀州鳴神社氏人等相論之經御沙汰  
之後祝典氏人相合楯一帖克造進

日前宮應永六年神事記曰有鳴神田南人母多

年知行上臈白冠中臈案主中仁飯酒を以て一

年一度饗應之而近年一向闕如之仍彼田地二

段小宅惣衆申出之自正平十二年出此地畢而  
又自正平十五年重久請取

此地出代  
錢一貫文

此外国造舊記永仁三年檢田取帳小宅郷  
忌部郷等に當社の田畠若干所あり事以載  
毎里

鳴武神

境内周九十二間

禁殺生

御祓池 周二十  
八間

鳴武流 長三十間  
幅一間半

社地鳴神社の境内未方小接きた別不區域を  
ふり社合廢し石を建し鳴武神慶安庚寅此七  
字を刻めし国造家寛永記小土入壺御前と以



ふや、何ぞ麗氣記曰鳴武大明神百濟國耆闍天  
王、四女也。日前宮為攝社神祭靈。九月二十六日  
天降給也。酒壺七飛、共以降。今仁田中鳴神社前  
卧居、長一丈或七尺、在干今人多見之。少何  
了按、少に麗氣記の言怪誕と以へると其中  
亦古於事實、或傳ふる者、何ぞ土人今に至ると  
此神を壺、御前と云ふと此ハ麗氣記酒壺の説  
何ぞ、何ぞ、小聞中然れハ女神と云ふ説も亦或ハ  
古於傳へたり。ん今村の北の山足に岸根於

岩城圓に鑿く壺を埋めたる如き所四五箇所  
何ぞ、何ぞも口徑三尺許深四五尺許人功を  
以て作す物の如く、なれとも何の為なる哉、知  
る者れし土人或ハ以ふ古此地を温泉出し  
ふ、蘇人其湯壺なるや、少くけりし今おと  
ふに是或ハ麗氣記の酒壺といへる物なりん  
る猶考ふへし

香都知神 境内周六十六間 禁殺生  
延喜式神名帳香都知神社



本國神名帳從四位上香都知神

鳴神社の東二町許にあらず社今廢して石以建

字香都知神慶安庚寅年八字を彫む社地或ハ

御船の芝といへる北の方一町許小御供并

あり

○堅真音神

境内周九十間

禁殺生

延喜式神名帳

堅真神社

本國神名帳正一位有馬音大神

鳴神山の麓村に五方七町許あり社今廢す

碑を建く堅真音神享保甲辰の八字を彫む三

代實録尔貞觀元年五月二十六日授紀伊國正

六位上堅真音神從五位上同七年春正月十七

日丁酉紀伊國從五位上堅真音神列於官社同

八年閏三月十三日戊午紀伊國從五位上堅真

音神授從四位下之頃也此後階を進めし正一

位以知へ罷りしふる當社延喜式に堅真神と

し三代實録に堅真音神とし本國神名帳に有

馬音大神と久國造舊記に音明神とあり其



稱を考ふに有馬ハ地名にして此地ハ古の有

真郷の地不<sub>レ</sub>音も亦地名不<sub>レ</sub>馬音<sub>ハ</sub>今有

いへる田地の延喜式並三代實録の堅真<sub>ハ</sub>何

字にのふも<sub>レ</sub>其義詳ふら<sub>レ</sub>○鳴武香都知堅真音三神

國命<sub>ハ</sub>以<sub>レ</sub>碑を立<sub>テ</sub>遺跡を標し鳴神社の

神主をして主祭せしむ

○小祠三社

里神社

社地周四十四間  
村の裏小あり

八王子社

社地周二十二間  
村中にあり

神明森

森形あり社なし  
村の乾よりあり

○阿彌陀寺

浄土宗鎮西派津秦村藥徳寺末  
村中小あり

○玄妙寺

浄土真宗西派大坂浄光寺末

村の西端あり明應中僧本正開基本堂の内

別々藥師如來を安置<sub>レ</sub>本興徳寺に本尊あり

東山藥師壇より不<sub>レ</sub>所よりありし<sub>レ</sub>寛政四年堂

内より遷<sub>レ</sub>凡

○辻堂

村の北よりあり

○廢興徳寺趾

東山よりあり麓に大門趾といふ字あり國造家



舊記亦援別に妙鶴山興德寺を以て禪宗の寺  
 此地より其草創ハ文保年中因造五  
 十七代從三位刑部卿俊文朝臣開山ハ大燈国  
 師二世徹翁と以て徹翁ハ古記に勅賜ハ  
 本堂方文庫裏鐘樓塔山門浴室子院十二坊福泉  
 庵徳林庵白泉庵恵林庵泉龍庵省徳庵徳末寺  
 壽庵宝徳庵興福庵養津庵瑞松庵月法庵  
 二十一箇寺神前村清觀寺同村瑞泉庵和田村  
 同村壽泉庵同村覺王寺大谷村福藏院秋月村  
 觀徳寺同村修禪寺同村普明寺新在家村大室  
 庵太田村龍珠院同村東禪寺新内村恵法庵忌  
 部村安養寺黒田村月藏院同村法雲庵鳴神村

東、耕、庵、善、田、村、清、湖、庵 寺領若干ありしに天正中亦庵絶  
 以其本尊ハ今玄妙寺の堂内に安き此山或ハ  
 神秀峯と號し因造後長東山興徳寺十景の詩  
 あり其一に神秀峯賦して山削芙蓉天外開  
 白雲飛盡勢崔嵬地靈境勝鍾神秀カラス會見僊人騎  
 鶴來之見えたり此地舊因造家菩提寺此地ハ  
 了しハ今寺ハ庵せり之を以てと山の西南  
 ハ猶因造家の葬地と云  
 ○有馬皮田



田畑高 本村の内を籠り

家数 八十四軒

人数 三百六十七人

村の北六町許にあり和名抄郷名有真あり国造家舊記本有馬郷新有馬郷等あり其名此地に残りしあり此地紀川邊より水害に罹りて一旦亡絶し鳴神領とふる天正十三年豊大岡太田城水攻の時岩橋録子此地の屑見堤を築記亭最力を盡せし因り此地を興へてふれに居

此しむふまゝに穢多村とあり

正願寺

浄土真宗西派本渡村皮田西専寺末

廃祠四社

国造舊記康暦年中畠田注文小新有馬郷一宮ありしに此ハ紀三所の一をいふ三宮ハ之を新有馬郷とあり永仁此ハ秋月の郷の申入たり之国造家永仁三年に檢畠帳とあり今皆廃絶に○国造家寛永記に氏神社ハ日前宮此末社とて神幸ありとあり又音御前社国造



家寛永記に見中今皆廢絶凡

○地士

鳴神嘉左衛門

井邊村

草牟辨

田畑高七百三十九石七斗四升一合

家数七十六軒

人数三百五十六人

鳴神村の南六町は行々村、西小名新田は舊  
ハ村家皆此處より後東に方今の地に移る  
然りと今も猶舊の地ハ人家七軒許あり井邊  
舊忌部之書せし古に郷名は忌部あり荒賀郷  
有馬郷等に隣り其四至詳ならず以中古郷名は



以テ教村を統る制廢し獨當村其古名を傳  
 へ日前宮舊記嘉禎永仁等の文書に忌部郷と  
 あり慶長檢地に始めて文字を井邊小改むと  
 以へとも猶伊牟辨中唱へく古禰を失ハと猶  
 上古の事下れ御木鹿香に餘にいふへし

○小祠六

八幡宮

里神社

里神社

社地周七十六間  
 村の已方二町許前の山よあり

社地周二十二町  
 村の西一町あり西の御前といふ

村の南小町あり東の御前といふ里入  
 或ハ稲倉菟神又太玉命を祀るとい

ふ毎年正月村先此神前小く左  
 右列を於し座配の禮を行ふ

知茂飛社

社地周二十六間村の東一町許小  
 あり此社の南二十歩許御膳芝  
 以ふあり方一間高一尺何法謂ふ  
 ろを去ら以

辨財天社

社地周十六間  
 村中あり

牛神社

社地周十四間村中あり里人牛  
 頭天王を以ふ或ハ蛭子と云ふハ  
 誤なり

○直水谷

村の寅の方四町あり東山に麓ふり国造家也



瀬被水一なり碑石を建く直水谷の三字を刻

む古此水試以く神事の御酒を造るを以て永

六年日前宮神事記曰正月十日夜都鎮部御祭

御酒水迎有之神人等於直海谷奉迎之又曰十

二月御酒水迎事夜深後神人取直海谷水又神

事之古記曰十二月十二日の夜御酒の水を直

海谷より上王師むりへくそれにて御酒造

る田宮神の名も造るを以て

○大日堂 境内周八十間

直水谷に巽一町許より古現覺寺に廢跡も

る小堂の遺りなり 国造家應永比堂前平

岩よりいふ所より古に堂此石上より境内清泉

ハ効験有りて以て寺地曠野も臨み眺望は景

愛をへし

○念佛寺 浄土宗鎮西派津秦村薬徳寺末

○勝安寺 浄土真宗若山真光寺に属す

○廢寺三箇寺

總綱寺 村の辰方七町許あり此地は總綱寺谷

儀法堂 村の西邊田地の字に殘

安居寺 所在詳ならず以て國造宣俊建久六年職を



居寺国造之跡を永仁正平應永等の  
舊記より寺名見ゆ

○城跡

總綱寺谷に奥にありて忌部城を以て国造の家

人村垣藏入の地を以て守りて之を以て国造後範に

記に見ゆ

○御木 鹿香

古語拾遺糧原大宮造條より仍令天富命命太玉

孫率午置帆負彦狹知二神之孫以齋斧齋鉏始

採山材構立正殿故に其齋今在紀伊国名草郡

御木鹿香之郷

古語正殿  
謂之鹿香

採材齋部所居謂之御

木造殿齋部所居謂之鹿香是其證也と云今

其御木鹿香二郷の地を覓るに御木の地詳れ

ら次国造家傳に忌部山ハ古代檜山ハ二両宮

造管材木等出せりといへて是は因りて

忌部山良材あり地ふれを採材齋部氏此に住

し其地名を以て御木といふ鹿香小居り齋部

氏に對して御木の忌部といひて以て遂に御木

以名を畧して忌部を以て郷名とせしむるに



し然りと記ハ古語拾遺に御木郷と云ふ也和  
名類聚鈔中忌部郷と云ふ也其實ハ一所也  
と二所也あらは故に類聚鈔中鹿香郷忌部郷  
云々と御木郷云々と古語拾遺中御木郷鹿香郷  
ありと忌部郷ありと亦一證也云へし又鹿香  
郷も今廢也其地城見らば国造家舊記永仁  
三年檢田帳中黒田郷之内阿良加と云ふハ其  
頃所居らば名ハ黒田郷中の字に遺り鹿香郷  
廢也此事明らかと云へし然れハ井邊村鳴神社黒

田村等近郷皆い小一への御木鹿賀二郷は  
地小しく齋部氏の居る所なり其後世他姓も  
混したる所れと此邊めと舊記家ハ皆上古  
の齋部氏の末裔なる事知るへし其祖神は事  
ハ鳴神社鳴神社の條及神社考定の部鳴神考  
考詳あり合せ考ふへし

○地士二人

井邊縫之助

井邊善助







○麻為比賣神

境内周十二間

禁殺生

延喜式神名帳麻為比賣神社

本國神名帳從四位上摩為比賣神

西津秦の南一町許あり今社廢す享保年中

命あり石以建く麻為比賣神享保甲辰九

字を鑄むあり延喜式載る所の麻為比賣神

社本國神名帳載る所比從四位上摩為比賣

神也世傳ふ然るも此義疑ハし按ずるに

舊此地ハ有家郷の内ふりし以近世津秦領と

なり國造家正平二十年檢田取帳に知和夜

二段知和夜姫敷地あり康永二年段別帳亦

家郷千和屋免坪あり有家郷知和屋森と見

たり地あり此社ハ知和夜姫神なり事明らか

なり麻為比賣社廢絶して所在詳ならず

謾小此神をさして麻為比賣とせしむる

知和夜姫神詳あり延喜式備後國三谿郡

事紀國造本紀以天火明命五世孫知波夜令

國造又天神本紀乳速日命廣瀨神麻統連等祖



此賣神他小求むへきふりてハ姑くこを記  
して疑を存せしふ

天満宮

西津秦村村中より昔筑紫安樂寺とて畫像  
を勸請以祠の異より別當安樂寺より故より安樂  
の天神といひしを寺今廢せりといふ或云昔  
農氏より常に天神を敬信し或ハ聖像を作す或  
ハ神像を畫かく者有り或時京都北野社小諸  
社見えたり事有り此里小歸り社を建川其後神  
樹見えたり寛文中神跡を殿内より納むと  
いへり委くハ國造昌長作の神歸本殿記より見

元多國造家永仁元徳の舊記に此社の出と云

載に又天正十三年法樂連歌一軸國造家子藏

○小祠二社

里神社 東津秦の北より 妙見社 社地周二十八間 西津秦の北半町許より

○藥徳寺

瑠璃光山 普照院 境内方四十三間 禁殺生

- 本堂 方七
- 庫裏
- 藥師堂 方二
- 僧坊
- 鎮守五社



東津秦の良平町許小石開山詳承ら次中古  
 天台宗なりしに無住の時淨土宗の僧閻蓮社  
 元誓と以ふ者來て住し終尔宮郷鎮西一派は  
 本寺とふれ天正十四年寂是を中興開山  
 也次末寺十一箇寺あり栗栖村淨土寺太田村  
 來迎寺鳴神村阿弥陀  
寺井邊村念佛寺神前村智徳寺同村西迎寺和  
 田村西性寺北出島村淨善寺有家村正覺寺子  
 平村地藏寺出  
 島村地藏寺 ○寺家説曰當寺ハ  
 天皇の勅願所にして勅願を賜はる  
 鳥羽院熊野御幸の御時當寺小駐蹕し給ハ唐  
 天智 後

畫の藥師如來以寄附し給ふ今小什室と以本  
 尊藥師如來ハ昔此邊蘆原アサハラあり有る夜ふ  
 く光明を放つたは其の怪みく尋祿求  
 むる藥師如來の像あり草堂に安置し  
 蘆原藥師を仰ぐ今ハ此別堂小安し本堂  
 小ハ三尊に彌陀佛を安置以慶長年中寺地三  
 石免許あり元和の時是小襲用ら執付物ハ釋  
 迦三尊十六羅漢善導圓光兩大師二十五菩薩  
 涅槃等ハ畫あり六字名號 高林公親筆並祐



天和尚筆の畫縁起無量壽經葵章幕等菩提  
心公寄附せらるゝ為藥師堂の内石の高麗大石  
古物ゆく長祿三年八月吉日の銘あり近年  
一位老公親筆の瑠璃光山と云ふ四字の額を  
賜ふ

麩津秦堂

國造家永仁三年記に見えたり舊  
八領田若干あり

有家村

阿理遍

田畑高

六百十一石五斗一升八合

家数

三十二軒

人数

百四十七人

西津秦村の乾二町許小あり名義詳ならず

○里神社

村の坤一町許小あり

○正覺寺

浄土宗鎮西派藥徳寺末  
村中より

○麩寺五箇寺

念佛堂

村の南一町許小あり五輪石塔四基あり  
文字磨滅也



正法寺

寛文記曰舊八本堂塔方丈庫裡免田一町五端ありて之見中

覺王寺

東山興徳寺末

継禪庵

壽泉庵

寛文記不何也も天正十三年破滅去りて

北出島村

北出島村

幾多傳自麻

田畑高 四百八石九斗七升五合

家数 十八軒

人数 六十九人

有家村の西六町許小町に南北出島皆中島村とて出町南に對して北に以てり或は北に小宅郷の出島ありといへり

○春日明神社

社地周八間 村中東端小町に

○浄善寺

浄土宗鎮西派津秦村薬徳寺末 春日社の北に隣に

北出島村

五十五







税を蔵むる御倉を所々に置れ是を屯倉と  
 以へり大宅ハ即屯倉此所は地なる以てい  
 ふる日本紀  
 景行天皇五十七年冬十月  
 令諸国興田部屯倉  
 欽明天皇十七年紀  
 国置海部七倉  
海部ハ唯海邊漁戸の稱にして  
郡以名をふれは後此事と見  
中事ハ海部郡  
總論以記せり  
 孝徳天皇此御世所々屯倉罷らる事あり  
 姓氏録云皇別大家臣建内宿禰曾紀角宿禰  
オホヤケノオミ  
 宿禰之後也  
 天智天皇庚午年依居大家  
オホヤケ

負大家臣姓之ありてハ此人の居り地也  
 や村中南北の通衢ハ熊野街道あり

○小祠二社

若宮八幡宮 社地周六間 村中の東より 春日明神社 村中より

○麩紀三所二之宮

國造家舊記又紀三所の二宮ハ小宅郷小よりあり

○光福寺 春日山 真言宗古義勸修寺末

○地藏寺 春日社比南より

○正善寺 淨土宗鎮西派津秦村葉徳寺末

○石佛地藏堂 村中東より



〇玉子寺  
 〇地蔵寺  
 〇浄土宗鎮西派薬徳寺末  
 〇出島村  
 〇田畑高  
 〇家数  
 〇人数  
 〇手平村の良三町餘年可也

出島村

傳自麻 手平村枝郷

田畑高 百八十石五斗七升五合

家数 九軒

人数 四十一人

手平村の良三町餘年可也

〇里神社 村中孝丸黒と以ふ所小可也故小丸黒明神

〇地蔵寺 浄土宗鎮西派薬徳寺末 村中不也已



○秋鹿寺

此中... 新... 山...

○里軒坊

此中... 山...

○平林

此中... 山...

人...

...

...

田...

百八十五...

出...

...





